0041769000

0041769-000

259. 5-114-(3)

スタンツのペスタロッチー

玖村敏雄・著

澤沌社出版部

昭和7

AHB

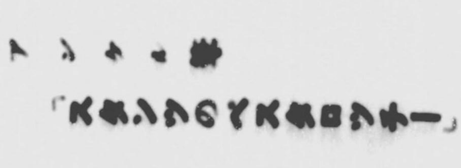
259.5
114

洋沈社教育叢書第三篇

スタンツのペスタロッチー

玖村敏雄著

昭和七



257.5-114

口絵解説

瀬島政雄

戦闘のあとに修羅を加へられたサルンニリン尼僧院のアーチ形の入口を今入り来つて、茫然れじるがごとくに立つはペスタロツチーである。翌ふる男兒の顔にさし入る陽の光はかゞやき、うしろにすがる女兒の顔には涙の中に晴れ行かむとする心がひらめく。ペスタロツチーの胸に咲れる幼な兒のすがたは信頼そのものゝすがたである。

背景に見ゆるは戦乱にこぼたれたる家の残骸か。なほそのうしろにかすかに見ゆるはスタンツのかなたに聳ゆるピラトスの山か。時は一七九九年の一月である。玄冬の雪は深くピラトスの山につもり、スタンツの里を覆める。その中に立つペスタロツチーの心はひとゝ春のごとくに暖かである。

しをびた子供等の心も躍し、此のペスタロツチーの生命の暖かさにはぐくまれて行く、ほろ〳〵

の書物、ひぜん病、脳汁の流るゝはれもの、盲腸炎、盲腸炎、盲腸炎を問して教育のやうにやつれた顔、すさみきつて人を信じ得ぬ眼ざし、これらはすべてペスタロッチーの心の久遠の温かさに温められて行く。

ペスタロッチーの涙は子供等と共に流れる。ペスタロッチーの微笑は子供等のほゝえみに伴ふ。子供等は世界を忘れスタンツを忘れ、ペスタロッチーが子供と共に、子供がペスタロッチーと共に居るばかりであると物語るペスタロッチーは、親のやうな心を以て子供等に接し、も加へる。詳々と敬へさとしもする。

かくしてその年の冬の陽の光がまだピラトスの山の雪を輝かしはじめない前に、ペスタロッチーの許にある子供等は見ちがへるやうにかはつて来る。眼ざしは明かにかゞやき、信頼の心は崩え崩でる。此の間におけるペスタロッチーが教育の三要素の、その最も簡かな一条項をとらへて一個の著書にうつし出せるものこそは此のアンタルの書である。

目次

スタンツのペスタロッチー……一
一、ノイホーフの隠者……二
二、フランス革命……一〇
三、スキス革命……一八
四、ウンターザアルプンの乱……二五
五、人類の勇者……三四
六、スタンツの孤児院……四二
七、スタンツの手紙……五六
英文、スタンツの手紙……一
註解……51

はしがき

おほよそ偉大なる人の生涯はその何れの部分をとつてみても、そこに全體が顯如として生きてゐるのである。隱れて野に耕すときも、顯れて公に働くときも、敗敗得喪を一貫して常に全人格の眞光が悠々として表現せられてゐる。ペスタロッチーの生涯は瞬時的にいつても決して短くはなく、内容的に見ても極めて複雜が多かつた。或る時は學生政治運動の闘士として、或る時は農場の經營者として、又或る時は貧民教育者として、著作者として、或る時は新教育の指導者として失敗もし成功もした。而も彼はその高邁銘にもあるやうに貧民の救濟者、民衆教化の人、貧兒の父、人類の教育者であり、眞の人間、眞の慈愛者、眞の市民であつた。さうして「すべて己をすてゝ他のためにす」といふ高邁銘の結びの一句が、生涯のどこをとつて見てもはつきりと刻印されてゐる。

スタンツの孤兒院は一七九九年一月中旬から後々五ケ月間、彼が教育的事業を營んだところ

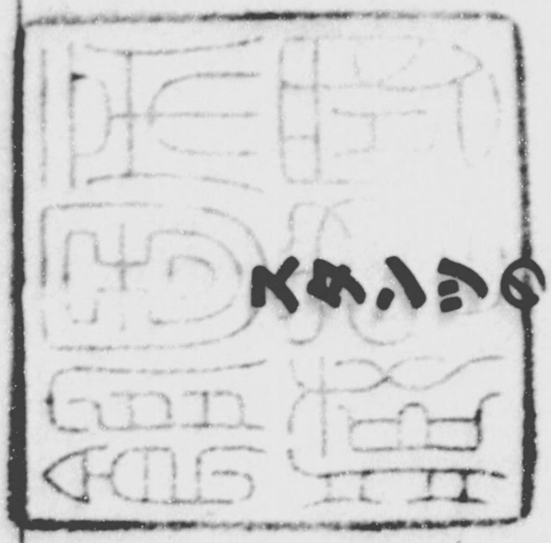
である。而もこの短い間の生活から教育に於ける永劫なるものが生命され、千古に亙つてその光を放つ所以のものは、實に彼の偉大なる魂がこの斷片にも殘りなく打ち込まれてあるからである。私共は彼がガーニゲルの鎖果に筆を振ひつゝ筆をとつた「スタンツの手紙」を讀んで、最も端的に彼の魂に觸れることが出來るやうに思ふ。この手紙は「臨終の夕暮」と共に彼の小さい著作中の二大傑作であり、世界にむかつて永遠にその存在を要求してよいものである。

嘗て私は「渾沌」紙上（大正十三年二月號）にこの手紙を英文から全譯して載せたことがあるが、今日にしてそれを見ればまことに不完全なものである。かくては折角の名篇をきずつけることになるので改譯して世に公にしたいと考へてゐた。然るに渾沌社は英文のまゝを印刷して英語の研究を弱まるゝ教育者の坐右に勧めたいとの提言をせられたから、今回は稍々飜譯と思はるゝ部分だけに譯註を加へて志ある人の力讀を俟つことゝした。この機會に於て私はノイホーフからスタンツまでのペスタロッチーの傳記を添へ讀者の豫備知識にそなへた。幾分でも參考になれば幸である。なほ原文は勿論ドイツ語で書かれ、初めてニーデラーが世に公にしたとき多少字句の修正を加へたものである。ド・ガンがそのペスタロッチー傳を編むにあたりフ

ランス語に飜譯して全文をのせたのを、更にラッセルが英譯したのが本書に飜譯された「英文スタンツの手紙」である。原文に比較して稍に脱落があり、又個々の言葉の直接性が佛英二ケ國語を通してうすめられ力强さが足らない點はあるが、なだらかな美しい文章はよくペスタロッチーの面目を傳へてゐると思ふ。なほ私がこの小本を作るについて學友大河内健君其の他の助力を得たことを記して感謝の意を表する。

昭和六年十月十七日

玖村敏雄



P.22.

一、ノイホーフの隱者

貧しきものゝ味方となつて貧しき者を生活の苦惱から救ひ出さうといふのが、ペスタロッチー（Pestalozzi）の若き日に於ける全願であり、臨終の日までを貧く希望であつた。牧師となつて貧民に魂の糧を與へむとし、法律家として不正なる壓迫から民衆を救はむとし、農業改良家となつて農民に生活改良の術を知らしめようとしたペスタロッチー、その志の表し方の上に於ける錯誤は或る人々が批評するやうに彼の意志薄弱を證明する材料と見るべきではあるまい。たゞひたすらに貧しき者の生活に直參しその全體世界の中に我が身をなげかけて、彼等と共に苦惱し彼等と共に勞働しつゝ神の恩光を浴びようとする切なる心の憧憬をその錯誤の底に於て見るべきである。教育の聖壇から呼びかけることも、法廷をまとうて訴へ來る者を待つことも彼にはまどろしかつた。貧民の救濟は貧民を知ることによらなければ着手の處がない。「人類の友は最も貧しきものゝ小屋に下らなくてはならない。貧者をそのうすぐらき部屋に、妻をそのすゝけた竈所に、子供をそのきはめて無理な日々の勞働に於て見なくてはならぬ」（農村の貧民學校についての著論一七七七年N.E.H.宛）といふ彼年の彼の信條は、彼がノイホーフ（Neuhof）の農場經營をとほして悟り得たところである。もとより彼が新婚の妻アンナ（Anna Pestalozzi）と愛兒ヤコブ（Jakob）とを伴つて一七七一年の春ノイホーフの新住宅に移り住んだ當初に於ては華かなる將來が豫期せられたのであるが、事業の事實的進行はたゞ益々農民の惨狀を詳かにせしめられるだけであつた。而もそはペスタロッチーその人の農業の失敗に於て自らが得た體驗であると同時に、貧しき者どもが貧しき人にのみ見せてくれる彼等の生活の實相であつたのである。

ノイホーフの事業は農業改良の模範を自らの農場に於て民衆に示し、之によつて民衆の生活向上に助力しようといふ意圖からはじめられたのであるが、事、志と違つてペスタロッチーが得たところのものは貧苦の加實の體驗である。この貧

苦を逃避することが出來ればいざ知らず、實に當時のスキスに於ける農民は生活の苦しみから脱出することは出來ない。それは嚴然たる事實であつた。ペスタロッチーがこの農民の貧苦をあきらかに知つたことは實に人類文化史上尊い意味をもつのである。彼は徒に貧苦の除去せらるゝ時代を想像的に描いてそれに自己陶醉をしたり、又さういふ時代を想望させて民衆を歎きなぐさめようとはしなかつた。現前の事實、それは生活苦である。この生活苦を除去する外的な道は除ろに謂ぜられることしか期待できない。先づ民衆は生活の苦惱にめげてはならない、奈れてはならない。たゞ生活に堪えてゆく、苦しみながら怯えて行かねばならない。而してかゝる生活態度の確立はたゞ貧しき者をその幼きに於て教育することによつてのほかは出來ない。さてその教育は唯勞働と節儉とを強ひることによつて出來るものではなく、潔き人間性の裏に培ひ、高き信仰の力を養ふことを第一義とするのでなくてはならない。かくて勞働と宗教、貧窮と道德とを生活の中に統一しつゝ人間性の開發を企てようとすることが實大なる教育上の課題となつて

來た。ノイホーフの貧民勞働學校はかゝる課題を自らの生活をとほして獲得したペスタロッチーの必然的な轉心によつて雲まれたのである。

一七七四年の冬、ノイホーフの農場を開放して貧民勞働學校を創設したペスタロッチーが、謂はゞ彈丸盡き刀折れて運命の軍門に降らざるを得なくなつた一七八〇年のはじめまでの苦闘は實に峻々しさの限りである。そこにはイエス・クリストを自らの生活の模範とする彼の姿が最も鮮明に刻み出されてゐる。たとひ外面的に見れば彼の事業は失敗に終つたとはいへ、その人間愛を離れた捨身の行の壯嚴さは永劫に輝きを放つて、教育救化の使命を滿らすのである。況んや彼自らの內面に於ては更に强き教育への信念が獲得せられ、他人の目には彼は既にその公的生涯を終るであらうと見えたときに於て、勃然たる興起の力を蔵してゐたのである。彼は驚嘆のほかはないではないか。「私はながい間、鳥の仲間に於ける一羽の鳥のやうに彼等の中にゐた。併しながら私は私を軽蔑する人々の嘲笑の中にあつて、彼等の聲高き呼びかけの言葉——汝あはれむべき叡！汝は自分自身を蔑

ふことさへ出來ぬといふ點で、最もみじめな日雇よりもつまらぬ事に、民衆を助けることが出來るなどゝ思つてゐるのか――といふ言葉の中にあつて、然りかゝる眞高き嘲笑をあらゆる人々の唇に讀みながら、「私は私の周圍にある民衆が沈淪してゐるところの惨めさの源泉を閉鎖しようといふ目的にむかつて唯一人で精進努力しようとの心願の力づよい流を止めることをしなかつたのである。否、一面から見れば私の力は次第々々に强くなりまさつて行つたのである。私の失敗は私の目指すところが眞理であることを餘ゝあきらかに敎へてくれた」（ゲルトルード は如何に其の子を敎ふるか、第一信）（Wie Gertrud ihre Kinder lehrt）と述懷してゐるペスタロッチーである。彼は今や疲れ果てゝ休息をしなければならなかつた。けれども彼の休息は絶對せるものゝ休止ではない。威猛一時は勞働に立つことも出來なかつた。妻アンナも一子ヤコブも決して健康ではなかつた。書では八十名近い貧兒等によつて嬉された島も、紡がれた糸車も今や顧みられずして荒るゝにまかせられてゐる。この一族の危急を救はむとしてチウリヒから來たトッネ

ーフ（Dorothy Nef）はその志壯なりとはいへ、なほ十八歲の少女である。まことにノイホーフは悲慘なる敗滅の運命を世間に曝してゐたといはねばならない。けれどもこの悲慘の眞りゆく中にペスタロッチー自身も朽ちてゆくのではない。後は休息してゐるのである。

一七八〇年から十八年といふ長い間ペスタロッチーは隱者の生活を送つた。自ら求めて世を避れたのではない、彼をして敎育事業に沒頭せしめるやうな好意ある援助者がなかつたからである。彼は世間からは無能者として棄てられた。友人からは同情はすべきも、今や彼ひの道も敵めの道も全く絶えた廢棄者として見られた。かゝる無能者、廢棄者の力を藉らうなどゝ考へるものがないのは當然である。而もたゞ獨りエフェメリデン（Ephemeriden der Menschheit）といふ新聞の主筆をしてゐたイーゼリン（Isaak Iselin）のみはペスタロッチーを理解し、又彼に期待するところがあつた。イーゼリンはノイホーフの貧民勞働學校經營についてペスタロッチーを最も有力に援助した人であるが、他の人々のやうに學校の失敗を

以て直ちにペスタロッチーを全然無能なりとはしなかつた。失敗した事業ではあつたが、彼はその中に永遠なるものゝ存することを認め、又ペスタロッチーの内にひそめる聖なる力を感じた。併しそれを再び事業の上に實現させるほど彼は十分に富裕ではなかつたし、又ペスタロッチーも疲れてゐた。今イーゼリンがペスタロッチーに勧め得ることはそれを文字を以て表現することであつた。

「聽者としてのペスタロッチーは能力の恢復するに從つて著作をなしながら筆をとるやうになつた。有名な「聽者の夕暮」(Der Abendstunde eines Einsiedlers)はこの時代の最初に書いたもので一七八〇年五月にエフェメリデンに載せられた。この書は謂はゞ人生の苦悩を味はひつくした聽者が神への念々の帰依によつて不斷によみがへらしめられつゝある自らの魂の世界を教育教化の問題に焦点せしめつゝ書きつけた靜かなる心境――それは山の端に沈みゆく太陽に見る荘厳なる靜けさであり、同時にまた暗の光を暗示する力づよい靜けさ――の表現である。この書の内容について私はこゝで何等もいはうとは思はないが、ノイホーフの生活が

深刻なるペスタロッチーの反省と思索をとほしていよ／＼永遠なるものへの確信となり、この確信に立つて次々と後の著作がなされてゆくところに後の生命の一貫を仰ぐのである。

「リーンハルトとゲルトルード」(Lienhard und Gertrud)といふ有名な教育小說、性の問題を社會的に扱つて徹底的に、又教育的に取扱つた「立法と嬰兒殺」(Gesetz und Kindermord)「スキス週報」(Ein Schweizer Blatt)に主筆となつて書いた幾多の論文、それらの著作は一七八一年から七年の間に書かれたものであつて、若しペスタロッチーのこの時代を作家の生活であるとするならば、そのあまりに作品の少いことを驚かねばならぬ。故にこれらは前にものべたやうに勞働のかたはらなされた聽者の仕事と見るべきであらう。而もその著作のいづれをひもといても、そこにこの作者に於て特に顯著であるところの鋭しき者への深き理解と切なる慈愛とが溢れてゐる。この理解と慈愛とがいつも教育といふ仕事に聖なる意義を附與しつゝ、全人類の魂によびかけてゐる。「リーンハル

トとゲルトルード」が全歐の心ある人々に與へた影響のきはめて大きかつたことは人のよく知るところである。

二、フランス革命

ノイホーフの隱者ペスタロッチーが「リーンハルトとゲルトルード」の第四卷を世に出したのは一七八七年であるが、その頃の歐洲には實に陰鬱な氣氣がフランスを中心として流れてゐた。ペスタロッチーが、その教育小說に於て人民に對し神の愛を映せる眞心をもつて政治に干渉するアーナー（Arner）を美しく嚴かに描き終つたころフランスでは專制君主を排斥して人民の總意による政治形態を作らうといふ急迫なる要聲が湧騰な革命主義となつて今や他の如何なる力も之を沮止することを得ないまでに熟して來てゐた。果然！一七八九年、ルイ十六世が召集した三部會が導火線となつて、國民議會の樹立、バスチユーユの破壞、各地に於ける農民の暴動などの事件を起し、一七九一年新憲法の制定にひきつゞいて新議會が成立したが、ジロンドとジヤコベン團黨の對立抗爭はやまず、恐怖政治、武斷政治の交替、ギロツチンの血腥き聲は人心を極度の不安に押しやつた。その中に共和國が出現し、國王の處刑といふ當大事が事もなげに行はれてゐるのであらうといふ流言蜚語が盛に流布せられるやうになつた。スキスに於てもラールベ（Laberte）やオツクス（Pestes（Pestes））などの新人はフランスの革命當員とひそかに連絡して自國に革命をもたらさうと奔走してゐたのである。

ペスタロッチーはその頃何をしてゐたのであるか。若し彼が民主的思想の尖端に於て活躍してゐたチウリヒ（Zürich）大學生時代のやうな熱度をそのまゝ持ちつゞけてゐたなら、恐らく彼は率先大革命に參せ參じたかも知れない。併しながら彼はそれから約十五年の歲月をたゞ机上に描かれた抽象的な社會論に於てではなくて、現實の痛切な農民生活に於て働きつゝ考へて來てゐる。さうして苦き經驗者によつて計畫せらるゝよき教育を以て國民の全體的啓發をなすにあらざれば國

既でよき國家は建設せられるものではないといふことを固く信じてゐた。この信念は大革命が漸く暴動化しゆく過程を傍觀していよ〳〵固くなつたのである。一七九〇年に「リーンハルトとゲルトルード」の改訂版第一、二巻を出し、更に九三年に第三巻を完成した彼の意圖は以前の四巻をよみ易く而も簡約して三巻とすることに在つたのであるが、而も改訂の箇處を互細に檢討してみるとき、そこにフランス革命を背景としてペスタロッチーが自らの根本的立場を毫末も變更しないでもよいといふ信念を力説して居り、又そのために若干の辯明と注意とをなしてゐることを知るのである。彼がその友フェレンベルグに宛てた手紙の一つで、世間は彼を民主的自由思想家であると中傷してゐるが、そは全く無實であるとのべ「リーンハルトとゲルトルード」は彼が「純なる貴族政治主義を助けるために全力を揮した永遠の記念」であると書いてゐるやうに、「隱者の夕暮」以後抱いて來た國父的思想を放棄しようとはしなかつたのである。

一七九一年の彼はライプチヒ（Leipzig）なる伯母の死による遺産相續の問題に煩はされてゐた。そして結局母方の親戚から委囑せられて、聖年の春ライプチヒに旅立つてゐる。それから問題を處理しての歸り途には幾つかのドイツ師範學校を參觀し、又當時有名な文學者を訪問した。彼がノイホーフへ歸つてまもない頃、皮肉にもフランスの立法議會は八月二十六日の會議に於て人類文化への貢獻者としてペスタロッチーをペンサム（Bentham）カンペ（Campe）ワシントン（Washington）クロップシトック（Klopstock）コシウスコ（Kosciusko）シルラー（Schiller）等と共に國籍の名譽市民に推薦してゐる。十月二十四日フェレンベルグ（Ferlenberg）に宛てた手紙にはかう書いてある。「私はこれまで常に國民の啓蒙を尊重して來た。けれども又常に最も明確にこの啓蒙は公民的秩序の保持とその種々なる促進手段とを開始することによつて最もよく整行せられることを主張して來た。それ故に私は何物をも恐れはしない。私は唯一人のフランス人とも直接又は間接に交渉をも持つて居らず、又フランス人の公民權が如何なる狀態にあるかも知らない。私は立法議會以來一文字も書いてはゐない」と。併し今やフランス市

民衆を與へられたといふ風評が高らである。だから彼はいよ「私は今や事實について眼會をなし、若し立法議會の若干の人々がともかく私への信頼を表明したといふことが事實ならば、この信頼を組織（フランス）の利益及び公共の安寧のために役立たしめることが私には最も重要なことになるであらう。とはい〳〵私は凡庸にして偏狭な人間であつてたいしたことの出來る男ではない。けれども國家が私を用ひ得るなら私はいつでも組織のために起たう」と。

彼は右の手紙でも明らかなやうにこの時までは全く大革命の傍觀者であつたが、今やフランスの要求があるなら何時でも起たうと決心してゐるのである。彼に自らがフランス名譽市民に推薦せられたことが確かな事實であることを知つて、立法議會とその議長宛に感謝狀を書き送つてゐるが、その中に「余は國民教育の方面に於て何人も及ばざるほどの光明を與へることが出來る」と自任して、この方面からフランスへ貢獻したいと願つてゐる。併しながら當時の政情はなほ濁池として濁り、民心の動搖はやまなかつたので、このペスタロッチーの念願は遂せられるべくもなかつた。

ペスタロッチーはかくて起たうとしても起たしめられなかつたから、依然としてノイホーフの隱者であつた。この隱者は、併しながら、著作の後、未曾有の政治的大變動を靜觀しつゝ、遥々たる筆を動かしてゐた。一七九三年の十一月頃からしばらく彼はリヒタースヴヰル（Zeitfeld）なる伯父ホッツ（Hotze）の家に留守居をしてゐた。その間にはチユリヒで繰り會ひになつたドイツの哲學者フヰヒテが彼を訪れて數日間滯在したといふやうな事件もあつたが、それより前十一月十五日フエレンベルグに宛てた手紙に次のやうなことが書いてある。「私は私の政治學の基礎を研究してゐる。……私の著稿は今筆耕に渡してある。……フヰヒテも政治學の方をこの著作（著稿）よりも先に印刷に附するがよいと言つた」と。このうち「政治學の基礎」といふのは後一七九七年になつて初めて公にせられた「人類發展の自然の進行に就いての余の討究」（Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwickelung des Menschengeschlechts）を指し、「著稿」

といふのは同じ年の二月脱稿してゐた「是か非か云々」(Ist oder Nicht)といふ論で、フランス革命の原因を論じたものである。この革命原因論は當時遂に出版されずにしまつた。「討究」は人類をその原始的生活より說き起して社會生活の種々相を描き、最後に宗教的道德的生活によつてのみ人類生活の完成さるべき所以をのべた著作である。次に「革命原因論」に於ては大革命の原因を檢討して遂にフランスの王、貴族、僧侶の墮落とそれに伴ふ民主的思想との兩面を認めて、前者がより根本的な原因であり、所謂啓蒙哲學はこの上層階級者の頽廢、墮落に刺激せられて起つたものである。けれども遂に報ゆるに暴を以てする民衆、マラーやロベスピエール一味に率ゐらるゝ過激革命主義は下層階級者を決して幸福にはしない。「諸君が反對しなければならぬ專制主義はその本質に於て少數者の要求を以て多數者の生命財産に放恣な干渉をすることに外ならぬ。然るに國民の支配的な調子は日々益〻多數者の要求を以て少數者の生命財産に放恣な干渉をなす傾向をとりつゝある。……併し餘輩はかうである、國民が無謀れを惡にすれば

する程益〻眞の自由の第一の障害を自らのうちに强めることになる」と忠告してゐる。大革命は自由と正義とを國民が確保することを目的としたものでなければならないが、そのためには靜かなる「立法の智慧」が「公民の力を組織し」なくてはならない。さういふ世界はたゞ內面的に國民が自覺して來ることよりほかに探し求めることは出來ない。各人の社會的自覺の上に立たぬところの、單なる「自然的衝動」の發動にすぎないフランス革命はなほ政治の發展段階よりいへば最も低いものであるといはざるを得ない。かく論じてペスタロッチーは折角與へられた眞實の政治への反省の機會をむざ〳〵と逸するフランス國民を惜しむのである。

なほこの時代の彼の生活を窺ふに足るものは一七九七年公にされた「寓話」(Fabeln)である。これは二百六十九の寓話をあつめたもので、機に觸れ時に應じた眞理の斷片を寓話の形式を以てあらはしたものである。その中には彼の自己補寫や大革命とあはせ考ふるとき深い味はひある社會觀や政治觀、更に道德や教育につ

いても暗示の多い寓話がある。こゝでその一々を例示するとよいのであるがそれは許されないけれどもペスタロツチーが大自然の懷に抱かれながら、こんな雄白いさうして意味深い暗示を心眼にみつめて爲を終してゐたのであるかと思ふとき讀者の豊かな靜かな心境にうたれるのである。

三、スキス革命

フランス革命がスキス（瑞西）を興へたと思はれるものゝ最初のあらはれは一七九四年の終りに近くチウリヒ湖畔の農民等がチウリヒ市民に對して自由の權利を獲得しようとする運動の勃發である。蓋し當時のスキスは第十五世紀以來の封建的なカントン（Kanton）（州）政治が嚴く敎會をあらはし、殊にカントンの首都に住む市民と農民との間に存する不平等は到底そのまゝで押しとほせさうもないやうになつてゐた。農民は市民との平等權を求めてやまない。即ち從來市民のみが所有してゐた商業權の開放、從來の同業組合が農民に禁じてゐた手工業を營み得

るの自由、營業につくことの自由、政治的權利獲得を要求した。さうしてこの要望は終にチウリヒ沿岸の農民を團結せしめて市民に對する强硬なる態度をとるに至り、暴動的性質をさへ帶びるやうになつた。そこでチユリヒ縣當局は遂一七九五年七月五日軍隊を出動せしめて農民運動の中心地ステーファ（Stäfa）を襲ひ主謀者を捕縛してこの運動を鎭壓した。ペスタロツチーはこゝに於て同じ月の中旬當局に請願して犧牲となつた農民の解放されむことを求めたが直ちには聽き容れられなかつた。併しながら農民はペスタロツチーの好意を感謝したのである。ステーファ事件はまことに痛切な出來事ではあつたが、やがて起るスキス革命を豫示する意味に於て重要性をもつてゐるのである。

ペスタロツチーが「討究」と「寓話」とを出版した一七九七年の事にはスキスの革命は必至のものと嵯ぜらるゝやうになつた。前にもいつたやうにペーター・オツクスを首領とするスキス革命黨員はフランスに倣つて自國にも共和國を建設しようと活潑なる暗中運動をつゞけてゐたし、農民も亦既に自由平等の政治の實

現されむことを待望するや久しいものがあつたのである。時恰もフランスでは怪傑ナポレオンが漸くその鬼才をあらはして四方に轟聲し、次々と征服國家を共和制に更めしめてゐたのであるが、そのナポレオンはオーストリヤ制肘の根據地を設けるためと稱して軍をスキスに向けようとしてゐた。この年の暮ペスタロッチーはノイホーフを出でゝ前に言つたステーフアに移り住んだ。さうして不安な組織に身を以て働かうといふ決意を示したのである。

一七九七年の十二月フランス軍は侵入した。スキス聯邦はこの傲慢なる赤軍の侵入に反抗しようと聯盟の宣言をさへしたのであるが、それは全く空しい外觀にすぎないでジユネーヴ湖岸のファウト(Vaud)縣に敵軍が侵入したとき聯盟は敢れてしまつた。そして數週間にしてバーゼル(Basel)チユールガウ(Thurgau)ソロチユールン(Solothurn)フライアルグ(Freiburg)などの諸縣は一たまりもなくフランス軍に降つた。ベルン(Bern)縣のみは敢然フランス軍と戰ふ決心をしたが、他の縣は未だ態度をきめないでゐた。チウリヒ縣では前にいつたやうな市民と貴

民との衝突後その間に反目がつゞいてゐたが、今外敵の迫り來る危機に於てかゝる内訌のあることは慨しむべきことである。ペスタロッチーと彼の大學時代の友ラファーター(Lavater)とは協力してこの間の調停に奔走した。さうして翌一七九八年の一月末にはチウリヒ市の監獄につながれてゐたステーフア事件連坐の貴民が釋放せらるゝやうにまでなつた。かくて縣民が和解したのであるから、この力を以てフランス軍に當らうとまで輿論は調子づいて來た。然るにさきに敵軍に反抗しようとしたベルン縣がフランス軍に降伏したのでチウリヒ縣も赤衞力を以て起つことは出來なかつた。かくて同じ年の三月二十二日佛軍司令官アリユス(Lauene)はベルンの人であるペーター・オクスの草案にかゝる新憲法を布告して二十二の縣を打つて一丸としたヘルヴエチア共和國を組織する旨を聲明した。新憲法によればヘルヴエチア(Helvetia)共和國はフランスに倣ひ五人の執政官によつて政務を執行せられ、參事會と大會議とを以て議決機關とするものである。封建制を破棄して中央集權とし從來の二十二縣は行政上の區劃として其の名を存

せしめる。憲法は法の前にすべての國民の平等なること、信仰、言論及び出版、商業に於ける各人の自由、比例課税法等を確立した。この原案は四月十二日に承認せられてスキス革命をともかく形式上完成したのである。但し直ちにこの新憲法を實施したのは十縣にすぎなかつた。ペスタロツチーは外國から强迫されての革命。たとひペーター・オクスがスキス人であるとしても革命黨員である彼がフランスに模倣して起草した憲法を無條件によろこび迎へる筈はないのであるが、既に革命が形式上成立した以上之に魂を吹き込み眞の自由を實現するためには、むしろ積極的に自らはたらかねばならぬと考へるやうになつたのである。殊に新憲法は農民、下層階級者についての彼の從來の心遣りを是認する部面が多かつたから之を採用しようと決心した。

けれどもスキス全國民は容易に新憲法を是認せず、殊に舊教地方であるグラルス(Glarus) とシュザアイツ(Schwyz) ウンターザアルデン(Unterwalden) 縣の人々はカプチン派の僧侶(Kapuziner) に煽動せられて積極的に反對した。フランス

はさういふ地方へは武力を以て壓迫を加へた。グラルスとシュザアイツとはこの壓迫に裝備して新憲法を是認した。たゞウンターザアルデン地方――その中心都市がスタンツ(Stanz) である――は頑强に抵抗した。

ペスタロツチーは同じ年の五月、アアルガウ(Aargau) 縣の主都アアラウ(Aarau) に赴いだ。さうして再び國民教育について計畫をたてようとした。併し何より先づ農民が新憲法の精神を理解して、ひたすら祖國の更生にむかつて進むようにしなければならなかつたので、政府へ「その昔民主的なりし諸縣に訴ふ」(Nemt, ihr die vormals demokratischen Kantone)といふパンフレットを送つていふ。

「吾等は吾等すべてを內面的に結合したる兄弟たらしむべき最初の聯盟の誓ひの精神にまで再び高めらるべきなり、又それを欲する。……如何なる犧牲もこの終極目的のためには貴すぎるといふことはない。兄弟よ、兄弟よ！この精神を以て吾等はスキスがいま一度榮え來り、一箇の分割すべからざる共和國としてヨーロツパの尊敬を得むことを願むものである。而してこの事たるもはやその分裂に於

ては期し得ざるところのものである」と。同一の趣旨で「スキス國民に告ぐ」(An Helvetiens Volk.) といふビラを書いたのもこの頃である。

彼は依然として野の人である。きはめて自由なる立場に於て刻下の問題に對して意見を公にした。併し生來の善良性はフランスの眞意を洞察しないで時にたゞ皮相的にその意圖を解してフランスのために提燈持ちをしたかの如く見えることさへある。例へば同じ年の八月十九日、ペーター・オグスやラールペ等の一味が策謀して成立した瑞佛同盟は實に局外中立國としてスキスを完全に獨立せしめてゐた從來の對外政策を破壞するものであるが、ペスタロッチーはこの同盟をもフランスが國際聯盟に立ち得る榮譽をスキスに提供するものと誤認し感激を以て迎へる文を書いたのである。併しながら又眞に國民的立場から忌憚なく民衆の福利のために訴ふべきを訴へもした。例へば新政府は教會が農民を農奴とすること、賦役に使ふことなどの制度は廢止したが、土地、領地、家畜小屋からの收益に課稅する十分一稅は暫くそのまゝ存置しようといふ意向であると知つたとき、彼

夜も幾夜も農民を集めてその不當なる所以を講演し、又六月には「十分一稅に就いて」(Ueber den Zehnten) といふパンフレットを公にしてゐる。このパンフレットは農民への反響よりも、直接損害を蒙るべき教會側からの激昂を買つた。次に七月下旬には革命に參加したために舊政治下で名譽及び財產を毀損せられた愛國者の損害は國家が賠償すべきであると論じた一文を草した。これらの合理的要求に對して新政府は決して耳を傾けるに吝ではなかつた。ペスタロッチーの言はしばゝ新政府の用ふるところとなり、又新政府は必要にして利用すべき人物と見込むやうになつた。彼が新政府の機關新聞に主筆として任命せらるゝやうになつたのも決して偶然ではない。

新政府の文部大臣は當時なほ三十三才の壯年であつたが恐らく他の大臣よりもすぐれた人物であつたらしい。彼はスタプファー (Stapfer) といひカント哲學に理解の深い理想主義の思想家であり、又人文主義的態度を採つて人類文化のために古典研究の必要を力說した。この若き文部大臣は就任すると同時に全スキスの教

育制度の完全なる新基礎樹立の計畫を發表し、各縣の主都にあつた學務委員に學者及び貴族のみを任命してゐたのを改めて他の低き階級の者も加へた。又模範學校や師範學校の創立をも目論んだ。同時に新聞紙を發行して國民的精神を高め、殊に農民の精神的道徳的陶冶をなさうとも企てた。さうしてこの方面の任務をペスタロッチーに負はしめようと考へたのである。八月七日ペスタロッチーの友ラファーターがスタプファーに宛てた手紙には「きはめて獨創的でユニークで且つ有用な人物であるペスタロッチー君も亦あなたによつて支持されることは私のよろこびとするところ」といつてあるが、正式には八月二十日に至つて「ヘルヴェチア國民新聞」(Der helvetische Volksfreund) の編輯を委任せられた。

時の人ペスタロッチーがはじめて組織の委任をうけてはたらくことになつた八月二十日は記念すべき日であり、而もその仕事たるや嘗て獨力經營した「スキスツ週報」と性質を同じくし、民衆の啓蒙を目的とするものであるから、ペスタロッチーは自信と希望とを以て事に當り得たのである。たゞ個人經營でなくスタプファーに監督せられ、(ツス(Huss) ラファター(Lavater) マイスター(Meister) フレミ(Hermi) フキッスリ(Tschiffeli) 等に協力せられ新制度の宣傳告知などを第一の任務とした點に於ては豫分の制約をうけた嘗である。併し彼は主筆として重要な論文に執筆したのである。この新聞は週刊であるが、その第一號は一七九八年九月八日に出た。それからペスタロッチーは十二月七日まで――この時から後に述べるやうな事情でスタンツへ赴いた――筆をとつてゐるが、こゝでその論文の一々について述べる必要はないやうに思ふ。何となれば既にのべたやうに彼が獨力でパンフレットを書いたときと思想や態度を改めてはゐないからである。

四、ウンターヴアルデンの亂

ウンターヴアルデン縣はチウリヒの四南方にある美麗な形をした湖、フヰールヴアルドステツテ(Vierwaldstätte) 湖を境とする四南の地方であつて上高地と丘陵地とに分たれてゐる。その丘陵地帶の中心都市がスタンツである。この地方は肥

沃な丘つゞきの島、果樹園、牧場が多く、それから次第に高峻となつて遂に南方テイトリス(Titlis)の氷河をいたゞくアルプスの山脈につらなるのであるが、瀧流の便よく氣候も比較的穏和で住民は謂はゞ他との交通なくして中世の夢なほさめやらず簡素にして幸福な自給經濟を營んでゐたのである。彼等は畜業についての知識などもつてはゐないし、一般に教養もきはめて低かつたが、親譲りの牧畜と果樹栽培には多年の經驗で事缺くことゝもなく平和に安樂に生活をしてゐた。貧しき者は政府も教會も救恤したが、親戚が決して見殺しになどしなかつたから、窮情であつても生命を脅かさるゝことはなく、質朴な人々の同情にすがつて乞食しても生きてはゆけた。彼等はカプチン派の僧侶に導かれて舊教の信仰に救はれてゐた。かうして何不足もなく長い平和をたのしんで來たこの山村に、今外部から强ひられた新憲法を押しつけて來たのである。前にものべたやうに隣りのグラルス縣、シュヴアイツ縣もはじめは新憲法に反對したが、まもなくフランスに屈伏せられてしまつた。併しウンターヴアルデン縣は容易に降伏しさうもなかつた。

一七九八年九月七日フランス軍はショウアンブウール(Schauenbourg)將軍を司令官としてウンターヴアルデン地方の中心都市スタンツに進擊した。これより前、この地方のカプチン派の僧侶にパウル(Paul)なる者がゐて民衆を煽動し、天使は民衆に味方して守護してくれるとか、オーストリア皇帝が援助に來るとかいつて善良な民衆を誑かし、新憲法への反感をあふり、フランスと一戰を交へることをも辭せぬ決心をさせてゐたのである。それ故にフランス軍が侵入して來たときも彼等は自らの勝利を信じて頑强に抵抗した。男も女も少年も戰線に立つて優秀なる大軍に刃向つた。數に於て比較にもならぬ土民軍ではあつたがフランス軍はしきりに憤まされたのである。この豫期に反した土民の頑强さに敵も漸く兇暴性を發揮し老若男女の分ちもなく虐殺又虐殺をつゞけ民家には火を放つて攻めたてた。さうして九月九日スタンツの町は全く佛軍に蹂躙された。次のやうな悲慘な出來事もあつた。老人や病弱者等はこの地方第一の教會たるスタンツ寺院にあつまり、ルシ(Lussi)といふ高德の老牧師(當時六十歳)と新禱をしてゐた。

勝ち誇つた佛軍の部將コルビノー（Corbineau）は部下とともにこの寺院の前まで來たとき、こゝに新手の敵軍ありと誤認して押し入つた。ルジ師はその時丁度聖壇に立つて會衆を力づけるやうな講演をしてゐた。血に狂へる佛軍の一人が壇上の老牧師を射殺した。それからこの聖堂は忽ち阿鼻叫喚の場所と化し、少數の將校が反對したにも拘らず、彼等無力なる者も多くは虐殺せられてしまつたのである。十一日ショウアンブウール將軍が來るに及んでこの蠻行を禁止するまではこの虐殺はつゞいて町でも行はれてゐた。

新政府の地方事務官トルツトマン（Trautmann）の報告するところによれば死者男二五九、女一〇二、子供二五、合計三百八十六人（但し後の正確な調査によれば四百十四人となつてゐる）焼失家屋三四〇、納屋二二八、小屋一四四、このうち自力で住宅を再建し得るもの五十人。九十七人は多少の補助を與へるなら何とか出來さうであるが、殘りの二百人ばかりの者は絶對的に如何ともしがたい。今や家なく所持品のすべてを失へるものが大多數である。殊に病弱な老人百十一人、親を喪へる百六十九人の子供、親はあつても無一物になつたために全くどうにもならぬ子供の二百三十七人の如きはまことに悲慘の極みである。「唯極少數の狂暴者のみがこの事件に於て飽くまで冷靜であり得よう」とミュラー（Müller）が言いてゐるのは尤もなことである。

前にもいつたやうにペスタロッチーが政府の機關新聞に主筆となつたのは恰もこの頃で、その第一號が世に出たのがこのスタンツの大騒擾の終つた前日、九月八日である。「九月十日、月曜日の朝に」（Montag, der 10. Herbstmonat, am Morgen）といふ小さい論文を次の週の新聞に書いてゐるところによれば彼はこの惨事をいたむ心に於て決して人後に落ちるものではないが、而もその由つて來る處を討究することに於ては冷靜である。「この戰爭の犠牲となつた災難は彼等の一般的墮落に責任がある。彼等はすべて暴徒であり、祖國をばその最も重大なる時機に於て最高の危險と決定的な破滅に近づけたのである。」たとひ煽動者パウルがゐたことがこの叛亂の有力な動因となつたとはいへ、而も彼の荒唐無稽なる宣傳

に迷ふが如き民衆の無智。正義、財産、眞理、名譽、信義に對する尊敬の情を缺ける國民の墮落こそは根本的な問題でなくてはならないと論ずるのである。フランスのとれる態度についても大いに非難してはゐるが、併しウンターヴアルデン地方の人々に對しても手酷しい批評をしてゐる。この批評が公にされたときスタンツの町の人々は果して冷靜に之を讀むことが出來たであらうか。之に就いては「スタンツの手紙」を讀むことによつて彼が受けた甚しい迫害と照合して見るべきであると思ふ。

ともあれスタンツの慘狀に對しては何等かの應急處置をとらねばならない。新政府は夫々の方面について救援策を立て且つ實行したが、十一月十八日に至りスタンツに孤兒院を設けて不幸なる子供等を收容しようとの計畫もなつた。その計畫によればスタンツの尼寺の外側建物及び附屬地の一部分を孤兒院に流用し、經費六千フランは救護費中より支出するものである。これは新政府の文相スタップアーと內相レンガー(Rengger)とが立案したもので、尼寺の主腦者や縣會などは全く與り知らなかつたのである。この決定には先づ尼寺當局が猛烈に反對した。感情的な原因がその反對說の底に流れてゐたことは勿論であるが、表面上の理由としては當時この寺に尼僧によつて敎へられつゝあつた女學校が附置してあり、且つ外側建物では家畜を飼養して居り、又寺領の管理にあたる使用人が住つてゐるから明渡しがたいことを擧げた。この反對理由を提げて縣會はスタップアーに尼寺の使用計畫を中止するよう申し出でたのである。併しながら政府は斷然之を斥けて豫定どほり實施することゝした。さうして內相レンガーがこのことの主任となつたが、法相マイヤー(Meyer)地方事務官トルツトマンに命じて然るべき經營者を物色せしめた。二人はこゝに於てこの地方の宗敎的關係を考慮し、カトリック敎徒であることを第一の條件として然るべき夫婦者を選ばうとしたが、適任者は容易に見つからなかつた。假りに適任者が見つかり、政府がその人の奮起を懇請してもウンターヴアルデン地方が蛇蝎の如く嫌つてゐる新政府の任命をうけ、而も建物の使用を拒んで來たスタンツの尼寺に孤兒を相手の生活を始めよう

などといふ勇士は稀有であるべきである、我がペスタロッチーはこゝに起つて自ら大膽至誠に當らうと決心したのである。

五、人道の勇者

事は少しく以前にかへるが、一七七九年八月十三日附イーゼリン宛のペスタロッチーの手紙に「私は文筆の人としては生れあはせてゐない。私は子供等を抱いてゐるか、人間らしい感情をもつてゐる人達と相對してゐるかするならば、それでよいのである。さうすれば私はペンでもつて作り上げたあの貧弱な眞理などは忘れてしまつて、書物も案内者もなしに、愛する自然の手にすがつて……私の道を歩むのである」といつてゐるのがある。思へばそれから殆んど十年彼は心ならずも耕作の傍文筆の人となり、殊にスキス革命後は國民新聞の主筆となつてゐたのである。たとひ彼自らが躊躇してゐるやうにそのペンが貧弱な眞理をしか書き得ないといふのは事實と相違してゐるとしても、而も彼の衷心の歡喜や滿足は文筆の生活からは得られなかつた。調はゞ彼の念願は弓絃の上につがへられた一本の矢である。文筆でかき出す小說も論文も强い力でその弓をひきしぼるのみである。人道のために、祖國のために、貧者のために書かれた夥しい文章は究極に於て教育といふ標的を能く明確に浮き出させ、それを射るべき一本の矢に渾身の力をあつめさせたのである。彼は既に幾度かこの矢を放たうとした。フランス革命の時も若しフランスが求めて來るなら何時でも起たうといつたことは既に述べたとほりである。

スキス革命が成立して後、新政府の文部大臣スタプファーははやくもその全力をこの國の教育改革に注いだ。教育制度の改革にも着手したが、根本問題は優良な教育者養成にありとして師範學校創立を思ひ立つた。さうしてペスタロッチーにその經營管理をしてくれるやう申し出でたのであるが、ペスタロッチーは之を拒んだのである。蓋し彼はもつと直接に貧民の教育に自らを捧げたかつたからである。一七九八年五月二十一日、彼はスタプファーがパリへ出張してゐて不在である

ために司法大臣マイヤーに次のやうな手紙をかいてゐる。

「祖國はその最下層の民衆のために教育及び學校の根本的改善をなすことの必要に迫られてゐることを信じ、且つこのことに關し三四ヶ月の實驗をなすならば最も重要なる結果をあらはし得ることを確信して私は文部大臣スタップフー氏の不在中、マイヤー大臣に請願する――文部大臣の下に私が此方面に於ける奉仕を祖國に申出でるために、又私の愛國的目的達成に必須なるべき處置を内閣に於て採られむことを文部大臣に請ふために――」と。

この申出を受けたマイヤーは内閣の執政官に報告した。當時首席の椅子にあつたルグラン(Legrand)は大いにペスタロッチーに興味と期待とをもち、幾度か會見して意見を交換したらしい。ペスタロッチー自らの報告するところによれば二人の意見は完全に一致し、ルグランは極力援助しようと約束した。さうして或る日の會見のときの如き「君が仕事を始めるまでは私は自ら進んで私の地位を去るやうなことはしないであらう」とさへいつた。スタップフーがパリから歸任するや愈々具體的な協議に入つた。ペスタロッチーはノイホーフに於ける自らの經驗と「リーンハルトとゲルトルード」第三、四卷に書いたやうな理想とを以てスタップフーと協議を重ねた。スタップフーが内閣に致した長文の報告の中には次のやうなことも書いてあつた。

「ペスタロッチー君は余に學校設立の計畫を提案したが、それは即今の必要と財源とに適切であるばかりでなく、又人及び公民一般の本性にも適切である。こゝにはたゞ立案者の名をあげるだけで十分である。彼はその優秀にして平易な著作に於て自らの有能を最もよく證明して居り、革命以前及び以後に於けるその祖國への私心なき活動は人のよく知る所であり、その意見は現代の最も教養ある人々及び最も高貴なる王侯から一致の賛同を得て居り、又その完全にして有効なる普通教育の制度によつて吾等の政治的改革に尊嚴を與へ以てその存續と力とを確實に保證しようと切望してゐるのである。」

さうしてこの報告にはなほペスタロッチーの計畫の信頼すべく、又新政府の根

本的精神と矛盾するところなきことを詳述し、積極的支持の必要を說いて經費の支出を要求してゐるのである。この意見は內閣も承認したのでスタップアーはペスタロッチーと具體的に細目を協議しつゞけてゐた。學校を創設すべき地方をどこにするかといふこと從つて校地は未だ決定してゐなかつたが、もう實行にとりかゝつてもいゝほどに事は進捗しつゝあつた。この時、突如としてあのスタンツの亂は起つたのである。

恰もこの頃ペスタロッチーは「ヘルヴェチア國民新聞」に主筆としての筆をとることゝなり、スタンツの亂を批評する文をもかいたことは前にも述べたとほりである。スタンツに孤兒院を設けるといふ計畫もこの新聞に載せられたのである。併し金を要するこの事業に自ら當らうとする人を見出し得ないばかりに荏苒日を過してゐるのをペスタロッチーは坐視することは出來なかつた。彼は自らのうちにこみ上げ來る孤兒への同情を禁ずること能はず、當てスタップアーと協議して理想的な國民學校を創設しようとした熱情を轉換して、殆んどすべての點から彼には不利な條件ばかりで成つてゐるスタンツに赴いて自らの教育理想を實行にうつさうと決心するやうになつた。これはスタップアーの意思も與つてゐたには違ひないが、而も根本をいへばペスタロッチーの熱烈な人類愛が敢然蹶起せしめたのである。かくて一七九八年十二月五日の國民新聞に於て內閣はスタンツ孤兒院に就いての布告を發表したのである。この布告によればスタンツの孤兒院は孤兒のよき教育、扶養、有用なる職業指導を行はむとするもので經費は前にも述べたやうに六千フランである。經營管理の任に當る者として三人を命じた。スタンツの近傍キユスナハト（Küssnacht）の紳商で、當時地方事務官に任命せられてゐたトルツトマン。スタンツの牧師アジンガー（Bersinger）。それからチウリヒ出の人ペスタロッチー。このうち直接の經營者たるペスタロッチーに就いてはノイホーフ時代の業績を紹介し、革命以來の努力を述べ、當て國民新聞紙上に於て「九月十日、月曜日の朝に」といふ論文を載せてスタンツ地方への熱烈なる關心を表明した人であるとまで附け加へてゐる。かくて新聞の主筆は後任者が見つかつたの

で十二月七日、ペスタロッチーは勇躍スタンツにむかつたのである。

「私は喜んで彼の地へ行つた。人々が無垢であることは（他の事件に於て）缺けてゐる所を補ひ、人々が離散してゐることは、兎も角感謝の心を起させることになるであらうと私は思つたのである。私の生涯の大きな夢を終に實現しようとする私の熱意は、謂はゞ水と火なしでアルプの最も高い峰の上に於てでも、私を働かせたであらう。」とは「スタンツの手紙」に彼自らの書いてゐるところである。思へばペスタロッチーは既に五十三歳である、さうして世間は彼の生涯を清算して了つてゐる、たゞ僅かに生命の餘燼がスキス革命に於て燃えてゐるのだと觀てゐた。世間のみではない、妻アンナがその頃の日記に書いてゐるやうに「あの齢になつてこんな仕事を引受けると知つて子供や私は勿論のこと、あの忠實なエリザベート・ネーフや友人等はみんな非常に心配した」のである。併しペスタロッチーはその妻にかう語つてゐる。「いまこそ私とお前との運命は決定せられるであらう。若し私が誤解されて居らず、世間一般が私を輕蔑し無視してゐるのがほんとうに當然であるのなら、私等には見込はない。けれども若し私が不當に判斷され、私が自任してゐるだけの價値がほんとうに私にあるのなら、お前は私によつて慰められ又支持されるであらう。だがもういふまい、お前の言葉は私の胸を刺く、お前が私を信用してくれないことはもう私には堪えられぬ。……」五十三歳の夫と六十一歳の妻との間、夢に生きてゐる人と現實生活の苦惱にうち碎かれてゐる妻との間には一の出來事に對して二つの世界がひらける。ともあれペスタロッチーは實に全生命を以て自己の所信を神に問ひ、その審判を待つ心を以てスタンツの事業をはじめたのである。

六、スタンツ孤兒院

猛烈な寒氣が襲はんとする十二月である。親もなく家もない子供等——その當時はともかく街の人々の慈愛によつて養はれてゐた——を一日もはやく人類愛の懷に抱いてやりたいペスタロッチーである。尼僧院一部を孤兒院へする建築を

監督しながら彼は幾度かかの悲惨なる孤児の身を思ひ、又彼等に施すべき教育の根本方針を考へたことであらう。ともかく子供の收容は急を要するので、まだ一室しか使用し得ず其他は工事半ばで壁も乾かず、窓硝も整はないにも拘らず翌年の一月十四日から開院した。從つて暫くはもとゐた家に夜はかへさなければならなかつた。この日トルツトマンが内相レンガーに宛てた報告書にはかう書いてある。「今日第一回の子供等を孤兒院に收容した。この慘憺的事業の故に神は我等のよき政府に祝福あらむことを。余はこの事業から最善の結果を期待する。かの惨めなる榛襤をまとへる子供等が遂にその不幸なる境遇から救ひ出されて、その教育と將來の獨立とを正當に與へようとする場所に收容されたことを見て私は深い感慨なきを得ないのである」と。それから數日後には子供は五十人になつた。二月には七十二人になつてゐる。

スタンツの孤兒院は始まつた。ペスタロッチーは唯一人の下婢フランチスカ、タイラー(Franziska Theiler)を使つて仕事に勵んだ。當時の狀態やペスタロッチーの經營方針や苦心については本書にその全文が英譯で載せられてある彼自らの回顧錄「スタンツの手紙」が最も詳細に且つ生き生きと物語るであらうから、私は多くを書く必要はない。たゞあの手紙の了解を助けるに足るやうな側面的資料として幾つかの報告書をこゝに紹介したいのである。

一月下旬、のペスタロッチーがした報告の中に當時收容されてゐた二十九人の男兒と十六人の女兒に就いての調査がある。いまその中の若干を轉載しよう。

一、ヤコブ・バゲンストツス(Jacob Bagenstoss)十五歳。スタンツ町の者、父死す。母あり。大いに健康、無能力。糸紡ぎ以外何も出來ぬ。乞食に慣れてゐる。

二、フランシス・ヨセフ・ブジンガー(Francis Joseph Businger)十四歳、スタンツ町の者、父あり。母死す。大いに健康、有能、行儀よし。ABCを知らぬ。糸紡ぎが出來る。極貧。

三、ガスパード・ヨセフ・ヴアザア(Gaspard Joseph Waser)十一歳。スタンツ

町の者、父あり。母死す。健康、有能、但し粗暴にして無作法なり。ABCを知らず、糸紡ぎ不能。乞食に慣れたり。

二六、マチアス・オーダーマット(Matthias Odermatt)八歳。スタンツ町の者、父殺さる。母あり。不具、病弱、貧困、無智、貧し。

二七、ヨセフ・クエッファー(Joseph Kuefer)九歳、スタンツ町の者、兩親あり。健康、かなりよき素質あり。讀み方の練習開始、糸紡ぎ不能、貧し。

以上は男兒、次に女兒を見るに

一、アンナ・ヨセフイネ・アムスタット(Anna Josephine Amstutt)十五歳。スタンツ町の者、父死す。母あり。健康、かなりよき素質を有す。讀み方の練習開始、糸紡ぎ不能、極貧。

二、クララ・ヴアザー(Clara Wasser)十二歳。スタンツ町の者。父あり。母死す。健康、かなり良き素質を有す。勉學を好む。ABCを知らず。糸紡ぎは出來る。乞食に慣れたり。

三、ジヨセフイネ・リーター(Josephine Rieter)十三歳。スタンツ町の者、兩親死す。健康、能力普通、讀み方の練習開始、糸紡ぎが出來る。極貧。

四、アンナ・マリア・ボイチギ。(Anna Maria Beutschigi)十一歳。スタンツ町の者、父追放され、母死す。健康、全然放任されゐたり。無智、きはめて悪き習慣をもつ。極貧。

規定によれば年齢は最低六歳となつてゐるけれども報告中には五歳の者もゐる

次に二月十一日附トルットマンがレンガー宛に報告したところによると「貧兒院は成功しつゝある。ペスタロツチーは晝となく夜となく働いてゐる。院には目下子供が七十二名ゐるが、寢藁不足の爲め宿泊し得る者は五十名である。この彼るゝことを知らぬ人がいかに活動的であり、又きはめて短期間に子供等がいかに長足の進歩をなしたかを見ては驚くほかはない。子供等は今や熱心に教授をうけてゐる。數年ならずして國家はこの有益なる施設に對して捧げた犧牲以上のものを確實に返却せられるであらう。余はよき尼僧等がはやく昇天するか他の僧院に

行つてくれることを望む。（子供の教育力を増すために書院全部が使用されるやうになるといゝと考へてかく言ふのである。）」これと略〻同趣旨の報告はアジンガーによつても爲されてゐる。ペスタロッチーの努力については「ペスタロッチー君は時の設備のために絶えず間なく働いてゐる。さうして彼者がこんな短い間に如何にその事業を成功せしめてゐるかは殆んど信ずべからざるほどである」といつて、トルットマンの報告に表書してゐる。

スタンツの事業は決して容易なものではなかつた。子供等の疾病、無智、無能、病弱だけでも大きい障害であつた。けれどもたゞそれだけならペスタロッチーの熱烈な愛を以てして何とか出來たのである。子供等の親の無理解、忠愚、貧窮は外からの第一障害であり、一般民衆の新政府に對する反感と異教徒に對する感情的な排斥とが合流してペスタロッチーを働く敵意、侮蔑、嫉忌こそは第二の障害であつた。それらの障害を克服することは決して一人の力を以てしてはしかく短時日に於て爲されよう筈はない。而もそれだけではなかつた。協同の責任者

であるトルットマンやアジンガーもその當初に於てはペスタロッチーに警戒したが、時の經過と〻もにその教育意見に於て、教育方法に就いて到底ペスタロッチーを了解することの不可能なるを知るに至つた。彼等は前にも述べたやうに教養ある有能な人であり、たとひ好意はもつてゐたにせよ、官利主義的立場からも、きちんとした組織を形の上にとりたい要求からも、ペスタロッチーのあの底深い眼がぢつと見まもつてゐる人間性の最内部の働きだとか、その靜かなる自然の雨して此會的な設眼だとかいふ點を重んずる心持は了解出來なかつた。三月二十五日、トルットマンは大臣宛に次のやうな報告をかいてゐる。

「會計係の任命、教授と手工とのために子供を組分けすること、必要なる監督官及び教師の任命を延期すればこの有用なる施設は危險に瀕せざるを得ないことを私は率直に申さねばならぬ。若し足の脱物のために一家に閉ぢ籠つてゐないのなら、私はこの重要事件についてあなたに遠慮なく話すために明日ルツエルンに參るであらうに、今はそれも叶はない。私はペスタロッチー君の熱心とその仕事

に倦まざる活動とを感嘆する。さうして彼君にはたしか感謝すべきであらう。併し私は彼君が自分の考へを實施する力なく又（この事業の成功に是非必要なことであるが）注意深く順序立つた發展を事業に與へることが出來ないであらうと豫見する。まことにこの施設のあらゆる樣々な必要を考慮する新たな組織をしなければ成功はしがたい。この優れた人には確乎たるところあり又優しさがある、しかし不幸にして屢〻それを間違つた時に用ふるのである。私はこのことに就き幾度も彼君と話しあつた。私は彼君にチウリヒへ行つて來るやうにさへ頼んでみた——その町の貧民學校の組織を、スタンツでも出來るだけ模倣するつもりで、詳細に研究するために。さうしたら彼君は行つて來た、が併し私はこの卷頭から何等滿足すべき結果を豫期はしない。といふのは彼君の考へは何のプランもなく、又子供等そのもの以外の何人からの援助もなしに、何でも自分でしようといふのだから。この施設はもつと多くの職員が必要である。併し何處に援助者が見出されようか。大臣閣下、私は政府の名譽と公共善とのためにあなたが此の事を心に

掛け、弊害があまり大きくならぬうちに救濟手段を見出されむことを乞ふ」

この報告は開院三箇月以上をすぎた時に書かれたもので、ペスタロッチーが出發に先立ちアンナ夫人にいつた言葉「お前は三十年間待つてくれた、もう三箇月待つてゐてくれないだらうか」といふ輝かしい希望の言葉も今は空しい夢にすぎないもののやうである。併し上に掲げたトルツトマンの報告の内容を仔細に吟味せよ、さうして「スタンツの手紙」特に第四十六節以下を讀んで見よ。さうすればこの二人の見解の根本的相違が了解せられるであらうし、又トルツトマンが失敗と思つてゐる點からこそ眞に永遠の成功が生れて來るべきであると言はざるを得ないであらう。幸にしてルグラン、レンガー、スタツプフーなど政府の首腦者は深くペスタロッチーの人格と手腕を信じて、トルツトマンの進言にもかゝはらず、全くその自由經營に委せたのである。

ペスタロッチーは四月十九日附で内務大臣レンガー宛に報告書を差し出してゐる。

「私は孤兒院の經過に關して報告を宣つてはならないと知りもし感じても居る。併し私は多くの金に費を要する事柄、而も私にしか出來ぬ事柄の重荷に壓されてゐる。不幸にして私の力を奪ふ事柄は院の本質的な仕事ではなくてたゞ多くのいやくざな事である。今日までの私の努力は成功したにも拘らず僅かばかりの言ふにも足らぬ資所道具がない爲めに計畫してゐることのすべてを爲すことが出來ない。その資所道具はハース氏に註文してあり數回請求したが、彼は私の催促に心も留めずしてもう二週間も待たさせてゐる。同時に又政治的敵意が再び當地にては繁ぜられはじめたが、それが子供に致命的な影響を與へつゝあり、而もこの敵意を檢討し制止しなくてはならぬ地位にある人々も孤兒院のために民衆を不滿にせしむべき時でないといつて居る。私は既に多くのことを成し遂げた。さうして私はきはめて多くの困難の只中に於て始められたこの施設が克ち得たる善き結果に就て、殊に若し此の事業が同じ原理と同じ方法とを以て繼續せられるならば確信を以て期待し得らるゝ善き結果に就いて、あなたが來て下さつて御自分で判

斷せられ得るやうな時の來らむことを熱望して居る。私はすぐに交附を受けた金の清算書を作つてあなたに送るであらう。當地に於ける勞働者の賃銀は非常に高く、私が常に最も低廉な費用で事を成さうとする仕方を妨げようとする偏見がある。併し私は出來得る限り經濟的にこの施設の目的を實行するために常に最善の努力をつゞけよう。

今のところ學習及び作業の時間は次のやうに決めてゐる。六時から八時まで學科、それから午後四時まで作業。次に八時まで學科。子供等の健康狀態は最もよろしい……作業と學科との結合の困難は日々減じつゝあり。子供等は次第に秩序正しく、而も熱心なる學習をなすやうになりつゝある。あなたはこれら放りばなしの山の子供等をこの程度にするさへどんなに困難であつたか想像出來るでせう。私共は困難であつただけそれだけに又目的に到達したことを一層嬉しく感じてゐる。……數人の子供は一種の腺熱性結膜に罹つたが今では殆んど全快した。私は私に必要なる男女の助手の件に關しチウリヒからの手紙をもどかしく待つて

るるところである。なほ私はあなたの意見が私のそれと一致してゐることを承つて安心させらるるなら嬉しいであらう。……」

この二つの報告書を靜かに讀みあはせて見るとき其の底を流るゝ闇い流の響をかすかながらも聽くことが出來るやうに思ふ。それにも拘らず「山々の雪が溶けてしまはないうちに子供等はもう昔のまゝではなかつた」と自ら書いてゐるやうに少くも子供との間には美しい精神の世界がひらけて來た。あの有名な叙述——「この援助と支持が缺けてゐたことがどんなに私に苦しかつたにせよ、それは私の事業の成功には好都合であつた。蓋しそれがために私はいつも子供等のために一切であらねばならなくされたからである。私一人が朝から夜まで子供等と一緒にゐた。心身兩面の子供等のすべての必要を滿してやつたのは私の手であつた。子供等はあらゆる必要な援助、慰藉、教授を直接に私からうけた。彼等の手は私の手に倚られ、私の目は彼等の目に注がれた。」

「私共は共に泣き共に笑つた。子供等は世界を忘れ、スタンツをも忘れて、たゞ彼等は私と共にあるを知り、私は彼等と共にあるを知るのみであつた。私共は飲み物、食ひ物を分ちあつた。私には家族も友人も雇人も居なくて、たゞ彼等あるのみであつた。私は彼等が病めるときも健かなるときも眠れるときも彼等と共にゐた。最後に寢床に入るのは私であり最初に起き出るのも私であつた。實際では彼等と共に祈り、又彼等のおのづからなる要求によつて眠りに入るまで歌へた。」——といふ「スタンツの手紙」の叙述は實にかゝる荊棘の中に咲き出でた人類教化界の最美の花である。荊棘の道を歩ふ者には此の花はたゞ遠き彼方のものであり、感傷の涙に泛ぶ影にすぎぬであらう。

一七九九年五月二十四日、ペスタロッチーは謂はゞ輝かしい作品にも比すべきこの子供等をともなつて新政府の都ルツエルンに旅足を試みた。內閣の首領者等もこの八十名近い子供等を歡び迎へ、今日の記念にとて新製貨（十バツツエン）（Batzen）一枚つゝを彼等に與へた。この好意はそのまゝに彼等のよき父ペスタロッチーへの內閣の信任を表明してゐるのでなければならない。

然るにこの旅足を試みてから十五日してペスタロッチーはスタンツを立ち退くことになつたのである。といふのはその頃までオースタリーに侵入してゐたフランス軍の一部二千名がウリ及びシュザアイツの新嘗祭反對騒擾情報にそなへるために引きかへして來てスタンツに司令部を置き、傷病兵の爲めに臨時病院をも設けなくてはならなくなつたのである。さうして軍部はペスタロッチーが孤兒院を營んでゐる建物を病院にあてたいと申込んだ爲めに、政府代表として駐在してゐたチロッヶは之を承諾したのである。六月八日、約八十名の子供等のうち六十名は町の人々の好意によつて夫々の家に引きとられたのである。但しこのことは當局者の命令といふよりも、フランス軍の騒擾が再び騒乱の不安を感かせたために子供の親や親戚が心遣ひして引取るやうになつたのであるとチロッヶは報告してゐる。ペスタロッチーにとつては全く思ひも設けぬ出來事であり、新く希望の曙光を見つけたばかりの時に子供等を手放すことは堪へがたいことであつたに違ひない。即ち去りゆく子等に衣服とシャツの類と少額の金とをもたせてやつたのである。それから委託された六千フランのうち、殘金三千フランをチロッヶ（Nestlerr）に引渡し、自らは全く疲れ果てた身體をガーニゲルの親戚に送すためにスタンツを去つた。

孤兒院は閉鎖したのではなく人員を減じたのである。あとには未だ引取る人のない子供が二十人もゐるのに、ペスタロッチーは何故ガーニゲルに去つたのであらうか。人間業ではないほどの活動をつゞけた六箇月、子供こそ見違へるほどの變化をしたとはいへ、地方民は勿論のことトルツトマンもアジンガーも彼には冷淡であるのみか、不信用であり敵意をさへもつてゐた。そこで孤軍奮闘、刀も折れ矢も盡き、疲れ果てて血をさへ吐いたと傳へらるゝ彼が、刺時を見て逃避したのであるといへようか。アジンガーが同じ年十一月に政府宛に書いたものの中に「ペスタロッチー君はこの孤兒院を最もよき意志を以て又模範とすべき活動を以て指導した。併し彼君の氣質は多くの不幸によつて激せしめられ、又これが年齢から來た疲勞、外觀への無頓着及びそも〳〵の始めから陷つてゐた多くの誤謬と

結びついて目的の實現を妨げた。さうしてすべての具眼の人々はペスタロッチー君がスタンツ以外のどこかに行けばいゝと待ちあぐむやうになつた」とあるが、トルットマンとともにペスタロッチーの協力者たるべきこの人がかゝる觀察を下すやうになつてゐたことは注意しなくてはならぬ。若しこゝに多少の誤謬が許さるゝなら、政府代表チョッケとブジンガーの二人はフランス軍の撤退をよき機會としてペスタロッチーを孤兒院から去らしめようと企てたのではあるまいか。（トルットマン　は數日後に事件の眞相を知つたと自ら政府に報告してゐる）それはペスタロッチーの健康や年齢や境遇に對する同情からも出來ることであるし、反對に頑固な彼を政治的に追放しようといふ意圖からも出來ることである。苟くも新政府の重要な事業の一つであり、又ペスタロッチーは最高幹部の厚い信任を得て其の地位に在るのに、直接出先事務官が一擧に事を決したことについて私共はその心事に對し疑なきを得ない。政府では事後に報告を受けたのみであるが、その六月十七日の會議でペスタロッチーに四百フランの慰勞金を贈ることを議決し

てゐる。二十名ばかりしかゐない孤兒院は實くファンマットといふ敵黨派の好意により維持せられ、カプシン派の僧が交替して讀み方、書き方、宗教の教授をしたが。その後フランス軍撤退後、八月チロッケは孤兒院を再び以前の如く復活したいとの希望を政府に申し出で、その管理を彼及びトルットマンに一任してほしいと願つてゐる。この願は政府に容れられて約四十名の孤兒は再び集つて來た。さうして子供等を飢えしめないで實に程度のものとなつて一八〇三年まで存續した。

併てペスタロッツーは健康を快復して再びスタンツの孤兒院に働きたいと申し出でたが、文部大臣スタップファーの理解と熱意ある奔走にも拘はらず彼は再びスタンツの孤兒等を見ることは出來なかつた。スタップファーがその頃書いたものの中には次のやうな一節がある。「その原因や性質を今は吟味すること能はざる誤〻の偏見に訴ひせられてこの優秀にして有名な老人がチロッケ、アジンガー兩君の手から受けた處置に就いて大いに不滿を鳴くのも無理でないことを余は遺憾に思ふ。兩君の誇張的不平によつて此の間にきはめて有用なものならんとしつゝあつ

た感覚を無力なものにしたのである」と。この見方はペスタロッチーへの深い同情から認したものゝやうである。併しながら若しかういふ事情でもなかつたのなら、ペスタロッチーが二十餘名の子供をのこしてスタンツを去らう筈がないと思はれる。

七、スタンツの手紙

ガーニゲル(Gerner)の領事の勝手中のペスタロッチーは如何なる思ひをしてゐたか。一八〇一年出版した「ゲルトルードは如何にその子を教ふるか」といふ著作の第一部第二十一節以下の後自らの言葉をこゝに引用しよう。

「併し考へて見てくれ、君は私を知つてゐる。どんな苦情を聞いて私はスタンツを去つたかを想像してくれ。無數した者が疲れ果てたる不安なる幾夜をすごして後、遂に隙地を見つけて生の喜みを呼吸したと思ふと、又もや不浄なる風によつて果てもなき大海になげ出された時、その苦へる心もて「どうして死ねないのだらう」と千度呟き、朝も夕暮の底にも眠ちこまず、なほも疲れた眼を押しひらいて再び四邊をみまはし、再び光線をさがし、かくてその光線を見つけたとき、その時後の手も足も疲れ果てゝ疲弊してしまつてゐる。——私はこのやうな狀態にあつた。

ゲスナー君、これらすべてのことを思つてみてくれ。私の心情、私の意志、私の事業、私の失敗——私の不幸、私の錯亂せる神經の動搖、私の沈黙——を想像してくれ。友よ！スタンツを去つたとき、ベルンに着いたときの私はこのやうな狀態にあつた。

フイツシヤは其處でガーニゲルの知人ツエンダー(Zender)を私に紹介してくれた。私は滞在中頗る好意をうけてそこに休養した。私は休養を是非ともしなければならなかつた。私がなほ生きてゐるといふことは不思議である。併しながらそれは幾度ではなかつた、それは大洋の中にある岩であつた——再び救ひ出るためにその岩の上に私は休息したのである。ツエンダーよ、私は生きてある限りあ

の當時を忘れない。當時の休息は私を助けてくれたのである。とはいへ私は仕事をしないで生きてゐることは出來ない。あのガーニゲルの高地から美しい果てしもない新谷を眼下に眺望した瞬間、實に私はそれまでにこんな廣大な眺望を見たことはなかつたが、而もその瞬間に於てすらなほ私は眺望の美觀についてよりもむしろ黙しく敎へられてゐる民衆のことについて考へたのである。私は私の目的をすて〻生きてゐることは出來なかつたし、又生きてゐたくもなかつた。」

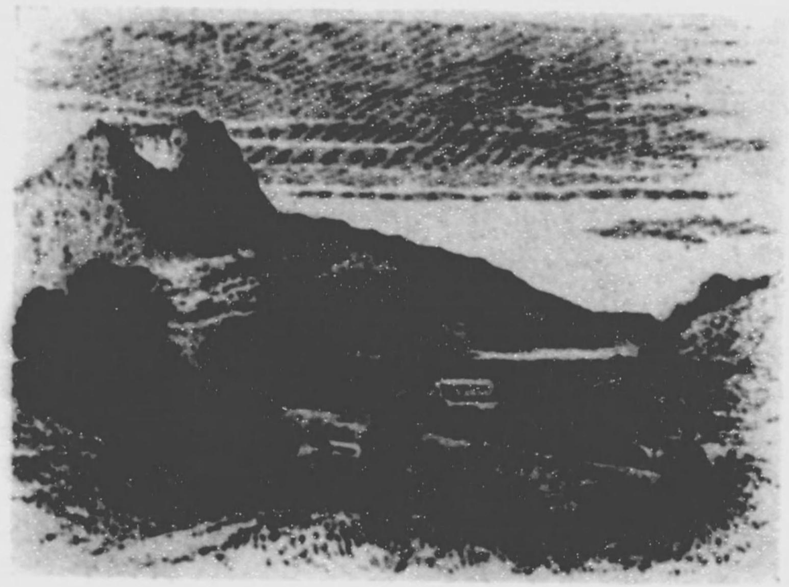
五十にしてなほ夢のあるペスタロッチーはその夢の實現のためには働かなくてはならない。働かずになら生きてゐたくないといふ彼はガーニゲル滯在中すでに筆をとつて有名な「スタンツの手紙」の原稿を書いたのである。

この手紙はチウリヒの書籍商であり彼の友であるハインリヒ・ゲスナー(Heinrich Gessner)に宛てた形で書かれてあるが、當時これを贈つたものではないやうである。さうして今日殘つてゐるのは後イヴァードン時代ペスタロッチーの補助者の一人となつたニーデラー(Niederer)が偶然發見して「週刊新聞人間敎育」の

一八〇七年第七、八、九號に連載したものである。この手紙は完結してゐないが、それはペスタロッチー自らが同年七月下旬からアルグドルフの學校で敎へるやうになつたために完結させる暇がなかつたのである。

ペスタロッチー研究家として有名なフンチーカー(Hunziker)が批評してゐるやうに、この手紙の如く「直接的に彼の心情を吐露して書かれ、深く彼の敎育上の根本的見解を述べ、而も優しく靜かに書かれたものは彼の著作に於ても全く稀である。」この手紙を讀む者は人道の勇者としてのペスタロッチーが獅子奮迅の姿を直接的に見るであらう、さうして自分もいつ知れずその中に融け込ましめられて暫しが程は我を忘れてしまふであらう。而も再び我に返つてこの現實を見る、ペスタロッチーが闘はねばならなかつた種々な障碍は今私共の周圍にもある。けれどもその障碍に屈し妥協して私共はいつの間にか自らの魂を賣つてゐる、又闘の苦しさに逃避しようと考へたりする。一つの眞實を貫かうとする努力に於てペスタロッチーの如く眞摯であることの如何に難いかを感ぜざるを得ない。組織上

の別天地としての完全界に忘我的な逃避をすることは必ずしも問題ではないが、當面の事實界にその完全を生み出しゆく純なる行への自己犧牲はなまやさしいものではない。完全を生み出さうとする熱意は完全の直觀と、基礎とに導かれなくてはならない。「暁者の夕暮」に於けるペスタロッチーありてスタンツの教育事業があるのである。若しそれがなくてたゞ感傷の涙を貧兒孤兒に注ぐのであつたらどうしてあの強さあの努力の一貫があり得よう。スタンツの手紙から受ける感傷と迫力との出つて來るところを私共は第一の問題としなくてはならぬと思ふ。故に教育方法の技術家としてのペスタロッチーをこの手紙から讀みとることは不可能ではないが、而もさういふ方法を生み、育て、盛つてゆく強さの基礎がペスタロッチーその人の内部深く潜んでゐることを忘れてはならない。方法は愛の影であるが、愛はまた人格の影である。ペスタロッチーの子供への愛を讃美することに於て從來の缺陥は十分である。私共は今やかくもよく愛し得たペスタロッチーの人格は如何なる侵蝕の上にあつて練成されたかを思はねばならない。



スタンツの街

Letter from Pestalozzi to a friend on his work at Stanz

BY

J. RUSSELL

KONTONSHA
TOKYO

Pentalumi in Stanz

Letter from Pestalozzi to a friend on his work at Stanz

1. My friend, once more I awake from a dream; once more I see my work destroyed, and my failing strength wasted.

2. But, however weak and unfortunate my attempt may have been, a friend of humanity will not grudge a few moments to consider the reasons which convince me that some day a more fortunate posterity will certainly take up the thread of my hopes at the place where it is now broken.

3. From its very beginning I looked on the Revolution as a simple consequence of the corruption of human nature, and on the evils which it produced as a necessary means of bringing men back to a sense of the conditions which are essential to their happiness.

4. Although I was by no means prepared to accept all the political forms that a body of such men as the revolutionists might make for them-

selves, I was inclined to look upon certain points of their Constitution not only as useful measures protecting important interests, but as suggesting the principles upon which all true progress of humanity must be based.

5. I once more made known, therefore, as well as I could, my old wishes for the education of the people. In particular, I laid my whole scheme before Legrand (then one of the directors), who not only took a warm interest in it, but agreed with me that the Republic stood in urgent need of a reform of public education. He also agreed with me that much might be done for the regeneration of the people by giving a certain number of the poorest children an education which should be complete, but which, far from lifting them out of their proper sphere, would but attach them the more strongly to it.

6. I limited my desires to this one point, Legrand helping me in every possible way. He even thought my views so important that he once said to me: 'I shall not willingly give up my present post till you have begun your work.'

7. As I have explained my plan for the public education of the poor in the third and fourth parts of *Leonard and Gertrude*, I need not repeat it here. I submitted it to the director Stapfer, with all the enthusiasm of a man who felt that his hopes were about to be realised, and he encouraged me with an earnestness which showed how thoroughly he understood the needs of popular education. It was the same with the minister Rengger.

8. It was my intention to try to find near Zurich or in Aargau a place where I should be able to join industry and agriculture to the other means of instruction, and so give my establishment all the development necessary to its complete success. But the Unterwalden disaster (September, 1798) left me no further choice in the matter. The Government felt the urgent need of sending help to this unfortunate district, and begged me for this once to make an attempt to put my plans into execution in a place where almost everything that could have made it a success was wanting.

9. I went there gladly. I felt that the in-

nocence of the people would make up for what was wanting, and that their distress would, at any rate, make them grateful.

10. My eagerness to realize at last the great dream of my life would have led me to work on the very highest peaks of the Alps, and, so to speak, without fire or water.

11. For a house, the Government made over to me the new part of the Ursuline convent at Stanz, but when I arrived it was still uncompleted, and not in any way fitted to receive a large number of children. Before anything else could be done, then, the house itself had to be got ready. The Government gave the necessary orders, and Rengger pushed on the work with much zeal and useful activity. I was never indeed allowed to want for money.

12. In spite, however, of the admirable support I received, all this preparation took time, and time was precisely what we could least afford, since it was of the highest importance that a number of children, whom the war had left homeless and destitute, should be received at once.

13. I was still without everything but money when the children arrived; neither kitchen, rooms, nor beds were ready to receive them. At first this was a source of inconceivable confusion. For the first few weeks I was shut up in a very small room; the weather was bad, and the alterations, which made a great dust and filled the corridors with rubbish, rendered the air very unhealthy,

14. The want of beds compelled me at first to send some of the poor children home at night; these children generally came back the next day covered with vermin. Most of them on their arrival were very degenerated specimens of humanity. Many of them had a sort of chronic skin-disease, which almost prevented their walking, or sores on their heads, or rags full of vermin; many were almost skeletons, with haggard, care-worn faces, and shrinking looks; some brazen, accustomed to begging, hypocrisy, and all sorts of deceit; others broken by misfortune, patient, suspicious, timid, and entirely devoid of affection. There were also some spoilt children amongst them who had known the sweets of comfort, and

were therefore full of pretensions. These kept to themselves, affected to despise the little beggars their comrades, and to suffer from this equality, and seemed to find it impossible to adapt themselves to the ways of the house, which differed too much from their old habits. But what was common to them all was a persistent idleness, resulting from their want of physical and mental activity. Out of every ten children there was hardly one who knew his A B C; as for any other knowledge, it was, of course, out of the question.

15. This complete ignorance was what troubled me least, for I trusted in the natural powers that God bestows on even the poorest and most neglected children. I had observed for a long time that behind their coarseness, shyness, and apparent incapacity, are hidden the finest faculties, the most precious powers; and now, even amongst these poor creatures by whom I was surrounded at Stanz, marked natural abilities soon began to show themselves. I knew how useful the common needs of life are in teaching men the relations of things, in bringing out their natural intelligence, in form-

ing their judgment, and in arousing faculties which, buried, as it were, beneath the coarser elements of their nature, cannot become active and useful till they are set free. It was my object then to arouse these faculties, and bring them to bear on the pure and simple circumstances of domestic life, for I was convinced that in this way I should be able to form the hearts and minds of children almost as I wished.

16. Now that I had an o portunity of carrying out this object, I felt sure that my affection would change the nature of my children as quickly as the sun changes the frozen earth in spring; nor was I wrong, for befor the snow of our mountains had melted the children were no longer the same.

17. But I must not anticipate. Just as in the evening I often mark the quick growth of the gourd by the side of the house, so I want you to mark the growth of my plant; and, my friend, I will not hide from you the worm which sometimes eats into its leaves, sometimes even into its heart.

18. I opened the establishment with no other helper but a woman-servant. I had not only to teach the children, but to look after their physical needs. I preferred being alone, and, indeed, it was the only way to reach my end. No one in the world would have cared to fall in with my views for the education of children, and at that time I knew scarcely any one capable even of understanding them. The better the education of the men who might have helped me, the less their power of understanding me and of confining themselves, even in theory, to the simple beginnings to which I sought to return. All their views as to the organization and needs of the enterprise were entirely different from mine. What they especially disagreed with was the idea that such an undertaking could be carried out without the help of any artificial means, but simply by the influence exercised on the children by Nature, and by the activity to which they were aroused by the needs of their daily life.

19. And yet it was precisely upon this idea that I based my chief hope of success; it was, as it were, a basis for innumerable other points

of view.

20. Experienced teachers, then, could not help me; still less boorish, ignorant men. I had nothing to put into the hands of assistants to guide them, nor any results or apparatus by which I could make my ideas clearer to them.

21. Thus, whether I would or no, I had first to make my experiment alone, and collect facts to illustrate the essential features of my system before I could venture to look for outside help. Indeed, in my then position, nobody could help me. I knew that I must help myself and shaped my plans accordingly.

22. I wanted to prove by my experiment that if public education is to have any real value, it must imitate the methods which make the merit of domestic education; for it is my opinion that if public education does not take into consideration the circumstances of family life, and everything else that bears on a man's general education, it can only lead to an artificial and methodical dwarfing of humanity.

23. In any good education, the mother must be able to judge daily, nay hourly, from the

child's eyes, lips, and face, of the slightest change in his soul. The power of the educator, too, must be that of a father, quickened by the general circumstances of domestic life.

24. Such was the foundation upon which I built. I determined that there should not be a minute in the day when my children should not be aware from my face and my lips that my heart was theirs, that their happiness was my happiness, and their pleasures my pleasures.

25. Man readily accepts what is good, and the child readily listens to it; but it is not for you that he wants it, master and educator, but for himself. The good to which you would lead him must not depend on your capricious humour or passion; it must be a good which is good in itself and by the nature of things, and which the child can recognize as good. He must feel the necessity of your will in things which concern his comfort before he can be expected to obey it.

26. Whenever he does anything gladly, anything that brings him honour, anything that helps to realize any of his great hopes, or

stimulates his powers, and enables him to say with truth, *I can*, then he is exercising his will.

27. The will, however, cannot be stimulated by mere words; its action must depend upon those feelings and powers which are the result of general culture. Words alone cannot give us a knowledge of things; they are only useful for giving expression to what we have in our mind.

28. The first thing to be done was to win the confidence and affection of the children. I was sure that if I succeeded in doing that, all the rest would follow of itself. Think for a moment of the prejudices of the people, and even of the children, and you will understand the difficulties with which I had to contend.

29. The unfortunate country had suffered all the horrors of war. Most of the inhabitants detested the new constitution, and were not only exasperated with the Government, but suspicious of its offered help. Opposed by the natural melancholy of their character to anything new coming from outside, they held fast,

with bitter and defiant obstinacy, to everything connected with their former condition, wretched as it was in many respects. To these people I was simply an agent of the new order of things. They looked on me as a mere instrument, working not for them, but for the men who were the cause of their misfortunes, and whose opinions, views, and plans were entirely opposed to their own. This political distrust was strengthened by a no less deep religious distrust. I was a heretic, and so all my efforts to do good could only imperil their children's souls. Amongst them no Protestant had ever held the smallest public office; what must they have felt, then, on seeing one made a teacher of children? To make matters worse, religious and political passion in Stanz was just then excited to an unusually high degree.

30. Think, my friend, of this temper of the people, of my weakness, of my poor appearance, of the ill-will to which I was almost publicly exposed, and then judge how much I had to endure for the sake of carrying on my work.

31. And yet, however painful this want of help and support was to me, it was favourable

to the success of my undertaking, for it compelled me to be always everything for my children. I was alone with them from morning till night. It was my hand that supplied all their wants, both of body and soul. All needfull help, consolation, and instruction they received direct from me. Their hands were in mine, my eyes were fixed on theirs.

32. We wept and smiled together. They forgot the world and Stanz; they only knew that they were with me and I with them. We shared our food and drink. I had neither family, friends, nor servants; nothing but them. I was with them in sickness, and in health, and when they slept. I was the last to go to bed, and the first to get up. In the bedroom I prayed with them, and, at their own request, taught them till they fell asleep. Their clothes and bodies were intolerably filthy, but I looked after both myself, and was thus constantly exposed to the risk of contagion.

33. This is how it was that these children gradually became so attached to me, some indeed so deeply that they contradicted their

parents and friends when they heard evil things said about me. They felt that I was being treated unfairly, and loved me, I think, the more for it. But of what avail is it for the young nestlings to love their mother when the bird of prey that is bent on destroying them is constantly hovering near ?

34. However, the first results of these principles and of this line of action were not always satisfactory, nor, indeed, could they be so. The children did not always understand my love. Accustomed to idleness, unbounded liberty, and the fortuitous and lawless pleasures of an almost wild life, they had come to the convent in the expectation of being well fed, and of having nothing to do. Some of them soon discovered that they had been there long enough, and wanted to go away again; they talked of the school fever that attacks children when they are kept employed all day long. This dissatisfaction, which showed itself during the first months, resulted principally from the fact that many of them were ill, the consequence either of the sudden change of diet and habits, or of the severity of the weather and the

dampness of the building in which we lived. We all coughed a great deal, and several children were seized with a peculiar sort of fever.

35. This fever, which always began with sickness, was very general in the district. Cases of sickness, however, not followed by fever, were not at all rare, and were an almost natural consequence of the change of food. Many people attributed the fever to bad food, but the facts soon showed them to be wrong, for not a single child succumbed.

36. On the return of spring it was evident to everybody that the children were all doing well, growing rapidly,and gaining colour. Certain magistrates and ecclesiastics, who saw them some time afterwards, stated that they had improved almost beyond recognition.

37. A few of the children, however, continued in ill-health for some time, and the influence of the parents was not favourable to their recovery. 'Poor child, how ill you look! I am sure I could look after you at home as well as you are looked after here. Come away with

me.' That was the sort of thing said by women who were in the habit of begging from door to door. On Sundays, especially, numbers of parents used to come and openly pity their children till they made them cry, and then urge them to go away. I lost a great many in this way; and though their places were soon filled by others, you can understand how bad these constant changes were for an establishment that was only just beginning.

38. Many parents thought they were doing me a personal favour by leaving the children with me, and even asked the Capuchins whether it was because I had no other means of subsistence that I was so anxious to have pupils. It was the general opinion amongst these people that poverty alone could have induced me to give myself so much trouble, an opinion which came out in their behaviour towards me.

39. Some asked me for money to make up for what they had lost by their children being no longer able to beg; others, hat on head, informed me that they did not mind trying a

few days longer; others, again, laid down their own conditions.

40. Months passed in this way before I had the satisfaction of having my hand grasped by a single grateful parent. But the children were won over much sooner. They even wept sometimes when their parents met me or left me without a word of salutation. Several of them were perfectly happy, and used to say to their mothers: 'I am more comfortable here than at home.' At home, indeed, as they readily told me when we talked alone, they had been ill-used and beaten, and had often had neither bread to eat nor bed to lie down upon. And yet these same children would sometimes go off with their mothers the very next morning.

41. A good many others, however, soon saw that by staying with me they might both learn something and become something, and these never failed in their zeal and attachment. Before very long their conduct was imitated by others, though not always from the same considerations.

42. Those who ran away were the worst in character and the least capable. But they

were not incited to go till they were free of their vermin and their rags. Several were sent to me with no other purpose than that of being taken away again as soon as they were clean and well clothed.

43. But after a time their better judgment overcame the defiant hostility with which they arrived. In 1799 I had nearly eighty children. Most of them were bright and intelligent, some even remarkably so.

44. For most of them study was something entirely new. As soon as they found that they could learn, their zeal was indefatigable, and in a few weeks children who had never before opened a book, and could hardly repeat a *Pater Noster* ar an *Ave*, would study the whole day long with the keenest interest. Even after supper, when I used to say to them, 'Children, will you go to bed, or learn something?' they would generally answer, especially in the first month or two, 'Learn something.' It is true that afterwards, when they had to get up very early, it was not quite the same.

45. But this first eagerness did much to-

wards starting the establishment on the right lines, and making the studies the success they ultimately were, a success, indeed, which far surpassed my expectations. And yet the difficulties in the way of introducing a well-ordered system of studies were at that time almost insurmountable.

46. Neither my trust nor my zeal had as yet been able to overcome either the intractability of individuals or the want of coherence in the whole experiment. The general order of the establishment, I felt, must be based upon order of a higher character. As this higher order did not yet exist, I had to attempt to create it; for without this foundation I could not hope to organize properly either the teaching or the general management of the place, nor should I have wished to do so. I wanted everything to result not from a preconceived plan, but from my relations with the children. The high principles and educating forces I was seeking, I looked for from the harmonious common life of my children, from their attention, activity, and needs. It was not, then, from any external organization that I looked for the regeneration

of which they stood so much in need. If I had employed constraint, regulations and lectures, I should, instead of winning and ennobling my children's hearts, have repelled them and made them bitter, and thus been farther than ever from my aim. First of all, I had to arouse in them pure, moral, and noble feelings, so that afterwards, in external things, I might be sure of their ready attention, activity, and obedience. I had, in short, to follow the high precept of Jesus Christ, 'Cleanse first that which is within, that the outside may be clean also'; and if ever the truth of this precept was made manifest, it was made manifest then.

47. My one aim was to make their new life in common, and their new powers, awaken a feeling of brotherhood amongst the children, and make them affectionate, just, and considerate.

48. I reached this end without much difficulty. Amongst these seventy wild beggar-children there soon existed such peace, friendship, and cordial relations as are rare even between actual brothers and sisters.

49. The principle to which I endeavoured to conform all my conduct was as follows: Endeavour, first, to broaden your children's sympathies, and, by satisfying their daily needs, to bring love and kindness into such unceasing contact with their impressions and their activity, that these sentiments may be engrafted in their hearts; then try to give them such judgment and tact as will enable them to make a wise, sure, and abundant use of these virtues in the circle which surrounds them. In the last place, do not hesitate to touch on the difficult questions of good and evil, and the words connected with them. And you must do this especially in connection with the ordinary events of every day, upon which your whole teaching in these matters must be founded, so that the children may be reminded of their own feelings, and supplied, as it were, with solid facts upon which to base their conception of the beauty and justice of the moral life. Even though you should have to spend whole nights in trying to express in two words what others say in twenty, never regret the loss of sleep.

50. I gave my children very few explanations; I taught them neither morality nor religion. But sometimes, when they were perfectly quiet, I used to say to them, 'Do you not think that you are better and more reasonable when you are like this than when you are making a noise? When they clung round my neck and called me their father, I used to say, 'My children, would it be right to deceive your father? After kissing me like this, would you like to do anything behind my back to vex me?' When our talk turned on the misery of the country, and they were feeling glad at the thought of their own happier lot, I would say, 'How good God is to have given man a compassionate heart!' Sometimes, too, I asked them if they did not see a great difference between a Government that cares for the poor and teaches them to earn a livelihood, and one that leaves them to their idleness and vice, with beggary and the workhouse for sole resource.

51. Often I drew them a picture of the happiness of a simple, peaceful household, that by economy and hard work has provided for all its wants, and put itself in a position to

give advice to the ignorant, and help to the unfortunate. When they pressed round me, I used to ask the best of them, even during the first few months, whether they would not like to live like me, and have a number of unfortunate children about them to take care of and turn into useful men. The depth of their feelings would even bring tears to their eyes, as they answered, 'Ah, if I could only do that!'

52. What encouraged them most was the thought of not always remaining poor, but of some day taking their place again amongst their fellows, with knowledge and talents that should make them useful, and win them the esteem of other men. They felt that, owing to my care, they made more progress in this respect than other children; they perfectly understood that all they did was but a preparation for their future activity, and they looked forward to happiness as the certain result of their perseverance. That is why steady application soon became easy to them, its object being in perfect accordance with their wishes and their hopes. Virtue, my friend, is developed by this

agreement, just as the young plant thrives when the soil suits its nature, and supplies the needs of its tender shoots.

53. I witnessed the growth of an inward strength in my children, which, in its general development, far surpassed my expectations, and in its particular manifestations not only often surprised me, but touched me deeply.

54. When the neighbouring town of Altdorf was burnt down, I gathered the children round me, and said, 'Altdorf has been burnt down; perhaps, at this very moment, there are a hundred children there without home, food, or clothes; will you not ask our good Government to let twenty of them come and live with us?' I still seem to see the emotion with which they answered, 'Oh, yes, yes!' 'But, my children,' I said, 'think well of what you are asking! Even now we have scarcely money enough, and it is not at all certain that if these poor children came to us, the Government would give us any more than they do at present, so that you might have to work harder, and share your clothes with these children, and sometimes

perhaps go without food. Do not say, then, that you would like them to come unless you are quite prepared for all these consequences.' After having spoken to them in this way as seriously as I could, I made them repeat all I had said, to be quite sure that they had thoroughly understood what the consequences of their request would be. But they were not in the least shaken in their decision, and all repeated, 'Yes, yes, we are quite ready to work harder, eat less, and share our clothes, for we want them to come.'

55. Some refugees from the Grisons having given me a few crowns for my poor children, I at once called them, and said, 'These men are obliged to leave their country; they hardly know where they will find a home to-morrow, yet, in spite of their trouble, they have given me this for you. Come and thank them.' The emotion of the children at these words brought tears to the eyes of the refugees.

56. It was in this way that I strove to awaken the feeling of each virtue before talking about it, for I thought it unwise to talk to

children on subjects which would compel them to speak without thoroughly understanding what they were saying.

57. I followed up this awakening of the sentiments by exercises intended to teach the children self-control, and interest the best natures amongst them in the practical questions of every-day life.

58. It will easily be understood that, in this respect, it was not possible to organize any system of discipline for the establishment; that could only come slowly, as the general work developed.

59. Silence, as an aid to application, is perhaps the great secret of such an institution. I found it very useful to insist on silence when I was teaching, and also to pay particular attention to the attitude of my children. The result was that the moment I asked for silence, I could teach in quite a low voice. The children repeated my words all together; and as there was no other sound, I was able to detect the slightest mistakes of pronunciation. It is true that this was not always so. Sometimes,

whilst they repeated sentences after me, I would ask them half in fun to keep their eyes fixed on their middle fingers. It is hardly credible how useful simple things of this sort sometimes are as means to the very highest ends.

60. One young girl, for instance, who had been little better than a savage, by keeping her head and body upright, and not looking about, made more progress in her moral education than any one would have believed possible.

61 These experiences have shown me that the mere habit of carrying oneself well does much more for the education of the moral sentiments than any amount of teaching and lectures in which this simple fact is ignored.

62. Thanks to the application of these principles, my children soon became more open, more contented and more susceptible to every good and noble influence than any one could possibly have foreseen when they first came to me, so utterly devoid were they of ideas, good feelings, and moral principles. As a matter of fact, this lack of previous instruc-

tion was not a serious obstacle to me; indeed, it hardly troubled me at all. I am inclined even to say that, in the simple method I was following, it was often an advantage, for I had incomparably less trouble to develop those children whose minds were still blank, than those who had already acquired a few more or less correct ideas. The former, too, were much more open than the latter to the influence of all pure and simple sentiments.

63. But when the children were obdurate and churlish, then I was severe, and made use of corporal punishment.

64. My dear friend, the pedagogical principle which says that we must win the hearts and minds of our children by words alone, without having recourse to corporal punishment, is certainly good, and applicable under favourable conditions and circumstances; but with children of such widely different ages as mine, children for the most part beggars, and all full of deeply-rooted faults, a certain amount of corporal punishment was inevitable, especially as I was anxious to arrive surely, speedily, and by the

simplest means, at gaining an influence over them all, for the sake of putting them all in the right road. I was compelled to punish them, but it would be a mistake to suppose that I thereby, in any way, lost the confidence of my pupils.

65. It is not the rare and isolated actions that form the opinions and feelings of children, but the impressions of every day and every hour. From such impressions they judge whether we are kindly disposed towards them or not, and this settles their general attitude towards us. Their judgment of isolated actions depends upon this general attitude.

66. This is how it is that punishments inflicted by parents rarely make a bad impression. But it is quite different with schoolmasters and teachers who are not with their children night and day, and have none of those relations with them which result from life in common.

67. My punishments never produced obstinacy; the children I had beaten were quite satisfied if a moment afterwards I gave them my hand and kissed them, and I could read in their

eyes that the final effect of my blows was really joy. The following is a striking instance of the effect this sort of punishment sometimes had. One day one of the children I liked best, taking advantage of my affection, unjustly threatened one of this companions. I was very indignant, and my hand did not spare him. He seemed at first almost broken-hearted, and cried bitterly for at least a quarter of an hour. When I had gone out, however, he got up, and going to the boy he had ill-treated, begged his pardon, and thanked him for having spoken about his bad conduct. My friend, this was no comedy; the child had never seen anything like it before.

68. It was impossible that this sort of treatment should produce a bad impression on my children, because all day long I was giving them proofs of my affection and devotion. They could not misread my heart, and so they did not misjudge my actions. It was not the same with the parents, friends, strangers, and teachers who visited us, but that was natural. But I cared nothing for the opinion of the whole world, provided my children understood me.

69. I always did my best, therefore, to make them clearly understand the motives of my actions in all matters likely to excite their attention and interest. This, my friend, brings me to the consideration of the moral means to be employed in a truly domestic education.

70. Elementary moral education, considered as a whole, includes three distinct parts: the children's moral sense must first be aroused by their feelings being made active and pure; then they must be exercised in self-control, and taught to take interest in whatever is just and good; finally, they must be brought to form for themselves, by reflection and comparison, a just notion of the moral rights and duties which are theirs by reason of their position and surroundings.

71. So far, I have pointed out some of the means I employed to reach the first two of these ends. They were just as simple for the third; for I still made use of the impressions and experiences of their daily life to give my children a true and exact idea of right and duty. When, for instance, they made a noise,

I appealed to their own judgment, and asked them if it was possible to learn under such conditions. I shall never forget how strong and true I generally found their sense of justice and reason, and how this sense increased and, as it were, established their good will.

72. I appealed to them in all matters that concerned the establishment. It was generally in the quiet evening hours that I appealed to their free judgment. When, for instance, it was reported in the village that they had not enough to eat, I said to them, 'Tell me, my children, if you are not better fed than you were at home? Think, and tell me yourselves, whether it would be well to keep you here in such a way as would make it impossible for you afterwards, in spite of all your application and hard work, to procure what you had become accustomed to. Do you lack anything that is really necessary? Do you think that I could reasonably and justly do more for you? Would you have me spend all the money that is entrusted to me on thirty or forty children instead of on eighty as at present? Would that be just?'

73. In the same way, when I heard that it was reported that I punished them too severely, I said to them: 'You know how I love you, my children; but tell me, would you like me to stop punishing you? Do you think that in any other way I can free you from your deeply rooted bad habits, or make you always mind what I say?' You were there, my friend, and saw with your own eyes the sincere emotion with which they answered, 'We do not complain of your treatment. Would that we never deserved punishment; but when we do, we are willing to bear it.'

74. Many things that make no difference in a small household could not be tolerated where the numbers were so great. I tried to make my children feel this, always leaving them to decide what could or could not be allowed. It is true that, in my intercourse with them, I never spoke of liberty or equality; but, at the same time, I encouraged them as far as possible to be free and unconstrained in my presence, with the result that every day I marked more and more that clear, open look in their eyes which, in my experience, is the sign of a really

liberal education. I could not bear the thought of betraying the trust I read in their faces, and was always seeking to encourage it, as well as the free development of their individuality, that nothing might cloud their angel eyes, the mere sight of which gave me such deep pleasure. I never tolerated frowns and gloomy faces, but always tried to call back smiles. The consequence was that, even amongst themselves, gloomy looks were kept out of sight.

75. By reason of their great number, I had occasion nearly every day to point out the difference between good and evil, justice and injustice. Good and evil are equally contagious amongst so many children, so that, according as the good or bad sentiments spread, the establishment was likely to become either much better or much worse than if it had only contained a smaller number. About this, too, I talked to them frankly. I shall never forget the impression that my words produced when, in speaking of a certain disturbance that had taken place amongst them, I said, 'My children, it is the same with us as with every other house-

hold; when the children are numerous, and each gives way to his bad habits, such disorder ensues that even the weakest mother is obliged to be reasonable, and make them submit to what is just and right. And that is what I must do now. If you do not willingly assist in the maintenance of order, our establishment cannot go on, you will fall back into your former condition, and your misery—now that you have been accustomed to a good home, clean clothes, and regular food—will be greater than ever. In this world, my children, necessity and conviction alone can teach a man to behave; when both fail him, he is hateful. Think for a moment what you would become if you were safe from wand and cared nothing for right, justice, or goodness. At home there was always some one who looked after you, and poverty itself forced you to many a right action; but with convictions and reason to guide you, you will rise far higher than by following necessity alone.

76. I often spoke to them in this way without troubling in the least whether they each understood every word, feeling quite sure that

they all caught the general sense of what I said.

77. Lively pictures of the condition in which they might some day find themselves, had also a very great effect upon them. I pointed out to them the result of each particular defect. I said, for instance: 'Do you not know men who are detested for their evil tongue? Would you, in your old days, care to be thus held in abomination by your neighbours and relations, perhaps even by your children?' In that way I used their own experience to put before them as striking a picture as I could of the evil results of our faults. Similary, I pointed out the consequences of right action.

78. Generally, however, I tried to make clear to them the very different effects of good and bad education. 'Do you not know men whose unhappiness is solely the result of their want of thought and application when young? Do you not know some who could earn three or four times as much if they could read and write? Will you not take advantage of your time here, and learn as much as possible, so

that you may never have to live by begging, or be a burden to your children?'

79. Here are a few more thoughts which produced a great impression on my children: 'Do you know anything greater or nobler than to give counsel to the poor, and comfort to the unfortunate? But if you remain ignorant and incapable, you will be obliged, in spite of your good heart, to let things take their course: whereas, if you acquire knowledge and power, you will be able to give good advice, and save many a man from misery.'

80. I have generally found that great, noble, and high thoughts are indispensable for developing wisdom and firmness of character.

81. Such an instruction must be complete in the sense that it must take account of all our aptitudes and all our circumstances; it must be conducted, too, in a truly psychological spirit, that is to say, simply, lovingly, energetically, and calmly. Then, by its very nature, it produces an enlightened and delicate feeling for everything true and good, and brings to light a number of accessory and dependent

truths, which are forthwith accepted and assimilated by the human soul, even in the case of those who could not express these truths in words. This verbal expression of the truths which rule our lives is not so generally useful to humanity as it is thought to be by men who have been accustomed for centuries to hear Christian instruction conveyed by question and answer, regardless of result, and who for a generation past have seen the mania of our poor century for empty speech more and more encouraged, alas! by the very people who pretend to enlighten it.

82. I believe that the first development of thought in the child is very much disturbed by a wordy system of teaching, which is not adapted either to his faculties or the circumstances of his life.

83. According to my experience, success depends upon whether what is taught to children commends itself to them as true, through being closely connected with their own personal observation and experience.

84. Without this foundation, truth must

seem to them to be little better than a plaything, which is beyond their comprehension, and therefore a burden. Truth and justice are certainly more than empty words to men, for they are the outcome of inward convictions, high views, noble aspirations, and sound judgment, to say nothing of the external signs by which their power may be made manifest.

85. And what is not less true is that this sentiment of truth and justice, when it has developed simply and soberly in the depths of a man's soul, is his best safeguard against the chief and most deadly consequences of prejudice; nor will it ever allow error, ignorance, or superstition, however bad they may be in themselves, to influence him as they do and always must influence those who, without a trace of love or justice in their hearts, are incessantly prating of religion and right.

86. These general principles of human instruction are like pieces of pure gold; the particular truths which depend upon them are but silver and copper. I cannot help comparing the swimmer, who loses himself in this sea,

made up of so many thousand drops of truth, to a merchant who, after having amassed a fortune, penny by penny, should become so attached not only to the general principle of looking after the pence, but to each individual penny, that the loss of a single one would distress him as much as that of a golden guinea.

87. When the peaceful exercise of his duty produces a harmony between a man's powers and feelings, when the charm of pure relations between men is increased and ensured by the wider recognition of certain simple and lofty truths, there is nothing to be feared from prejudices; they will disappear before the natural development of these feelings and powers like darkness before the dawn.

88. Human knowledge derives its real advantages from the solidity of the foundations on which it rests. The man who knows a great deal must be stronger, and must work harder than others, if he is to bring his knowledge into harmony with his nature and with the circumstances of his life. If he does not do this, his knowledge is but a delusive will-o'-

the-wisp, and will often rob him of such ordinary pleasures of life as even the most ignorant man, if he have but common sense, can make quite sure of. That, my dear friend, is why I felt it to be so important that this harmony of the soul's powers, the combined effect of our nature and first impressions, should not be disturbed by the errors of human art.

89. I have now put before you my views as to the family spirit which ought to prevail in an educational establishment, and I have told you of my attempts to carry them out. I have still to explain the essential principles upon which all my teaching was based.

90. I knew no other order, method, or art, but that which resulted naturally from my children's conviction of my love for them, nor did I care to know any other.

91. Thus I subordinated the instruction of my children to a higher aim, which was to arouse and strengthen their best sentiments by the relations of every-day life as they existed between themselves and me.

92. I had Gedicke's reading-book, but it

was of no more use to me than any other school-book; for I felt that, with all these children of such different ages, I had an admirable opportunity for carrying out my own views on early education. I was well aware, too, how impossible it would be to organise my teaching according to the ordinary system in use in the best schools.

93. As a general rule I attached little importance to the study of words, even when explanations of the ideas they represented were given.

94. I tried to connect study with manual labour, the school with the workshop, and make one thing of them. But I was the less able to do this as staff, material, and tools were all wanting. A short time only before the close of the establishment, a few children had begun to spin; and I saw clearly that, before any fusion could be effected, the two parts must be firmly established separately—study, that is, on the one hand, and labour on the other.

95. But in the work of the children I was

alredy inclined to care less for the immediate gain than for the physical training which, by developing their strength and skill, was bound to supply them later with a means of livelihood. In the same way I considered that what is generally called the instruction of children should be merely an exercise of the faculties, and I felt it important to exercise the attention, observation, and memory first, so as to strengthen these faculties before calling into play the art of judging and reasoning; this, in my opinion, was the best way to avoid turning out that sort of superficial and presumptuous talker, whose false judgments are often more fatal to the happiness and progress of humanity than the ignorance of simple people of good sense.

96. Guided by these principles, I sought less at first to teach my children to spell, read, and write than to make use of these exercises for the purpose of giving their minds as full and as varied a development as possible.

97. I made them spell by heart before teaching them their A B C, and the whole

class could thus spell the hardest words without knowing their letters. It will be evdient to everybody how great a call this made on their attention. I followed at first the order of words in Gedicke's book, but I soon found it more useful to join the five vowels successively to the different consonants, and so form a well graduated series of syllables leading from simple to compound.

98. I had gone rapidly through the scraps of geography and natural history in Gedick's book. Before knowing their letters even, they could say properly the names of the different countries. In natural history they were very quick in corroborating what I taught them by their own personal observations on plants and animals. I am quite sure that, by continuing in this way, I should soon have been able not only to give them such a general acquaintance with the subject as would have been useful in any vocation, but also to put them in a position to carry on their education themselves by means of their daily observations and experiences; and I should have been able to do all this without going outside the very restricted sphere to which they were confined by the actual circumstances of their lives. I hold it to be extremely important that men should be encouraged to learn by themselves and allowed to develop freely. It is in this way alone that the diversity of individual talent is produced and made evident.

99. I always made the children learn perfectly even the least important things, and I never allowed them to lose ground; a word once learnt, for instance, was never to be forgotten, and a letter once well written never to be written badly again. I was very patient with all who were weak or slow, but very severe with those who did anything less well than they had done it before.

100. The number and inequality of my children rendered my task easier. Just as in a family the eldest and cleverest child readily shows what he knows to his younger brothers and sisters, and feels proud and happy to be able to take his mother's place for a moment, so my children were delighted when they knew something that they could teach others. A sen-

timent of honour awoke in them, and they learned twice as well by making the younger ones repeat their words. In this way I soon had helpers and collaborators amongst the children themselves. When I was teaching them to spell difficult words by heart, I used to allow any child who succeeded in saying one properly to teach it to the others. These child-helpers, whom I had formed from the very outset, and who had followed my method step by step, were certainly much more useful to me than any regular school-masters could have been.

101. I myself learned with the children. Our whole system was so simple and so natural that I should have had difficulty in finding a master who would not have thought it undignified to learn and teach as I was doing.

102. My aim was so to simplify the means of instruction that it should be quite possible for even the most ordinary man to teach his children himself; thus schools would gradualy almost cease to be necessary, so far as the first elements are concerned. Just as the mother

gives her child its first material food, so is she ordained by God to give it its first spiritual food, and I consider that very great harm is done to the child by taking it away from home too soon and submitting it to artificial..school methods. The time is drawing near when methods of teaching will be so simplified that each mother will be able not only to teach her children without help, but continue her own education at the same time. And this opinion is justified by my experience, for I found that some of my children developed so well as to be able to follow in my footsteps. And I am more than ever convinced that as soon as we have educational establishments combined with workshops, and conducted on a truly psychological basis, a generation will necessarily be formed which, on the one hand, will show us by experience that our present studies do not require one tenth part of the time or trouble we now give to them, and on the other, that the time and strength this instruction demands, as well as the means of acquiring it, may be made to fit in so perfectly with the conditions of domestic life, that every parent will easily be able to

supply it by a member or friend of the family, a result which will daily become easier, according as the method of instruction is simplified, and the number of educated people increased.

103. I have proved two things which will be of considerable use to us in bringing about this desirable improvement. The first is that it is possible and even easy to teach many children of different ages at once and well; the second, that many things can be taught to such children even whilst they are engaged in manual labour. This sort of teaching will appear little more than an exercise of memory, as indeed it is; but when the memory is applied to a series of psychologically graduated ideas, it brings all the other faculties into play. Thus, by making children learn at one time spelling, at another exercises on numbers, at another simple songs, we exercise not only their memory, but their power of combination, their judgment, their taste, and many of the best feelings of their hearts. In this way it is possible to stimulate all a child's faculties, even when one seems to be exercising his memory only.

104. These exercises not only gave my children an ever-increasing power of attention and discernment, but did very much for their general mental and moral development, and gave that balance to their natures which is the foundation of human wisdom.

105. You yourself have seen, my friend, how the giddiest of them would often burst into tears, how the courage of innocence developed, and how the higher feelings of the most intelligent became gradually more and more active. You must not, however, be deceived, and think that the work was already accomplished, Moments of highest hope alternated with hours of disorder, sorrow, and anxiety.

106. I myself was not always the same. You know what I am when ill-will and spite are in league against me. Like the worm that so easily eats its way into the fast-growing plant, malice attacked the very heart of my work.

107. Certain men would just glance at my immense task, and finding something which was not so well managed as in their own room

or kitchen, or in some richly endowed institution, would at once give me the benefit of their advice and wisdom. But, as I could never follow it, they all looked on me as a man upon whom advice was thrown away, and used to say to each other, 'There is nothing to be done with him; he is a little queer in the head.' This was the hardest thing I had to bear.

108. You will hardly believe that it was the Capuchin friars and the nuns of the convent that showed the greatest sympathy with my work. Few people, except Truttman, took any active interest in it. Those from whom I had hoped most were too deeply engrossed with their high political affairs to think of our little institution as having the least degree of importance.

109. Such were my dreams; but at the very moment that I seemed to be on the point of realizing them, I had to leave Stanz."

註　解

註　解

1. 頁 題目. a friend は Heinrich Geisner. 本書六〇頁參照、

1. 頁 2. 節 4. 行 reasoning…… 更に幸運なる後の世の人がいつかはきつと私の希望の糸を、現に切斷されてゐる所に於て、繼ぐであらうと私を確信させる理由、

1. 3. 1. I looked on the {Revolution as……
evils (which……) as……

1. 3. 4. 彼等の幸福に缺くべからざる諸〻の條件の實施にまで國民を呼び返す必然的手段(媒介)として革命が生んだ闘……

1. 4. 1. 私は革命當員のやうな團體が勝手に作るかも知れなかつたところの政治形態をすべて承認しようといふ氣は動じてなかつたけれども……

2. 5. 11. 完成的教育、併しそは彼等をその固有の環境から拔き出すどころか、更に強くその環境に結びつかしめる教育……

2. 6. 1. 私は自分の希望をこの一點に限つた。ルゲランは出來るかぎりあらゆる手をつくして私を援助した……「私は君が事業を始めるまでは自ら好んで現在の地位(新スキス共和國の執政官)を去るやうなことはしないであらう。」

3. 8. 6. 希望のまさに實現されむとするを感じた人がもつ(感じた時誰でももつやうな)非常な熱心さで、私はそのプランを執政官スタプファーに提言した。ところが彼は普通教育の必要なる所以を如何にも十分に了解してゐることを證し得る眞摯さで私を激勵した。

3. 7. 4. 併しウンターザアルテンの災難のために私は上述のことについてもはや詳論などして居られないやうになつた。……さうして(政府は)私に私の計畫を成功させる一切(の要件)が殆んど全く缺けてゐる場所(スタンツ)に於て此度だけは特別に實施してみるやう頼んだのである。

3. 9. 1. (本書四〇頁參照)

4. 10. 1. (同　　上)

4. 11. 9. 私は實際決して金に不足はさせられなかつた。(本書三二頁參照)

4. 12. 3. 時間は明らかに殆んど浪費せられぬことであつた。といふのは戰爭のために家を失はしめられ困窮に陷れられた若干の子供等が直ちに救護せられねばならぬことは最も緊要なことであつたからである。

6. 14. 1. この子供等は彼等だけで固まり（他と交際せぬ）彼等の仲間なる年の少い乞食子供等を輕蔑し、此の平等を苦にする振りをした。さうして彼等の從來の慣習とは非常にちがふ此の家の習慣に適應することは不可能であると悟つたやうに見えた。

6. 15. 4. 彼等の粗野、内氣、外見上の無能力の背後には最も優れた能力、最も強い力が隱められてあることを私は以前から長い間觀察してゐた。（彼等といふのはスタンツの子供ではなく、一般に極貧にして放任されてゐる子供を指す）……私は生活の一般的必要といふことが、人間に事物の關係を教へるために……又關はゞ人間の一層劣等な要素の下に埋もれてゐてそれが自由な狀態に置かるゝまでは發動的にも有用にもなる

ことの出來ないところの識能力をめざますために、如何に大切なものであることを知つた。

7. 16. 1. 私はこの目的を實行する機會を得たので……而して私は誤らなかつた。といふのは……

7. 17. 1. anticipate…早計に判斷する。見越しすぎる。

8. 18. 9. 私を助け得るであらう人々の教育が高ければ高いほど、益ゝ私を理解する力が乏しく、又私が復興しようと力めてゐた單純な出發點を理論の上だけで固持する力も乏しかつた。……（本書六四頁參照）

8. 19. 1. 而も私が成功の主なる希望を立てたのは、まさしくこの考へに基づいてであつた。それは、關はゞ他の無數の足解に對して土臺であつた。

9. 21. 1. かくて私が欲しようが欲しまいが、私は先づ獨りで實驗をしなければならなかつた。

9. 22. 7. 人間の一般教育に影響する他のすべてのこと…

10. 23. 2. 教育者の力はまた家庭生活の一般的狀態によつて生々させられてゐる父の力でなければならぬ。（家庭生活一般を處理してゆく父の聰明な力の關であらう）

10. 25. 1. 人は善なることは容易に承認する、而して子供は容易にその善に聽從する。併しながら子供が善を欲する所以のものは諸君即ち教師、教育家への爲めではなくて、子供自らの爲である。諸君が子供を導かんとする善は諸君の頽廢れな氣分や感情に依存してはならない。それは其れ自身善であり、事物の本來から（道理上）善であり、而も子供が善として認め得る善でなければならない。子供は自らの快樂に關係ある事物に於て諸君の意志の必然なることを感じなくてはならぬ。かくして初めて子供は諸君の意志に從ふことを期待することが出來るのである。

11. 28. 3. in doing that = in winning the confidence and affection……

11. 39. 5. 彼等はその生來的に陰鬱な性格によつて一切の新しい外來のものに反對して、劇しい病的な片意地で以て、假令多くの點に於て惨めなところがあつたにせよ、おのれ等の以前の狀態に關係ある一切の事に強く執着した。

12. 29. 11. 私は眞教徒であつた。だから善をなすための私

のあらゆる努力は（彼等から見れば）たゞ彼等の子供の魂を危くすることが出來るのみであつた。彼等の中では新教徒は未だ嘗て最下位の公職にも就いたことがなかつた。然らば一新教徒（ペスタロツチー）が子供等の教師になつた（された）のを見たとき、果して何と感じたであらう。なほ附つたことには恰もその頃……感情が異常の高度に興奮させられた。

12. 31. 1. （本書五二頁參照）

13. 32. 1. （本書五二頁參照）

13. 32. 11. Looked after both myself…… 兩方面（衣服と身體の）を私自身で世話してやつた。

13. 33. 1. This is how it was that these …… this は上文の內容を、it は that以下をうける。かくの如くにして……やうになつた。

14. 34. 3. 又その結果（they）は滿足を與へる(be so)譜はなかつた。子供等は常に必ずしも私の愛を了解するときまつてもゐなかつた。彼等は邊幅……に淡泊してゐたので、食物を十分に與へられ而も何もせずに居れると期待してこの僻陬に來た

のである。

16. 38. 5. 私をしてかくも面倒なことに心を悩ますやうにさせる所以のものは、唯私が貧乏であるからだといふのが、この人々の間に於ける一般の見解であり、さうしてこの見解は私に對する彼等の態度となつて現はれたのである。

16. 39. 1. 或る者はその子供等にもはや乞食させることが出來なくなつたことにより蒙つた損失を補償するために金をくれといひ、……他の者は又彼等自身の煩惱を述べたてた。

18. 42. 1. to be free of their vermin ……彼等が身につけてゐる虱から免がれる。

with no other purpose than that…… 彼等が清潔にせられよい着物をきせられるとすぐ又逃れ出さうといふ（逃れ出される）ことを唯一の目的として……

18. 43. 1. 彼等は大膽な敵意を以て入つて來たのであるが、暫くすると彼等の判斷が一層正しくなつて、此の大膽な敵意を克服した。

19. 44. 5. Pater Noster… 天父に捧げる祈禱。マタイ傳第

六章、九——十三參照。

Ave＝Ave Maria……聖母マリアに捧げる祈禱

18 45. 1. 併しながら此の最初の熱心は學校を正しい方向にむけて出發させるために、又（彼にはさうなつたのであるが、theyはstudies）學習を成功せしむるに與つて大いに力があつた。

20. 46. 10. 約言すれば私はイエス・キリストの高き訓戒「外なるものも淨められむためには先づ內なるものを淨めよ」といふのに從はねばならなかつた。さうして此の訓戒の眞理であることが證明せられた時ありとせば、其の時こそ證明せられたのである。（其の時とはペスタロッチーがキリストの訓戒に從つて孤兒院を經營したときである。即ち內的訓練によつて外的訓練が事實上出來たのである）

21 49. 1. 私の經營の一切を依らしめようとした原理は次のやうであつた。先づ第一に子供等の同情心を擴大せしめるやうに努め、且つ彼等の日々の必要を滿してやることにより、愛と親切とを彼等の印象や行動と不斷に接觸せしめ、これらの感

情が彼等の胸に刻み込まれるやうに努めよ。次に彼等をして己が環境に於てこれらの徳を賢明に、確實に、豊富に實行せしめるやうな判斷力と手腕とを與へるやう試みよ。最後に善と惡とに就いての觀念に關れること及びそれに關聯する說話に關れることを謹慎する勿れ。而して汝はこのことを特に日々に起る平凡な出來事に結びつけて行はねばならぬ。日々に起る平凡な出來事の上にこれらの事に關する汝の全責務が働らしめられなくてはならぬのは、子供等が彼等自らの感情を想起せしめられ、又謂はゞ道徳生活の英及び正の概念の落着たる確實な事實によつて支持されるやうにするためである。

22. 50. 15. to have given……不定法のto giveの過去の形。

22. 16. 50. 唯一の生活の資を得るに乞食と養老院とが附きものゝ怠惰と惡徳とに貧者を放任して置く政府……

22. 51. 1. 私は嘗て純朴にして平和な家庭の幸福を子供等に想像させた。さういふ家庭は勤勞と節儉とによつて一切の必要物をとゝのへ、而もそれ自ら

で無智なるものに忠告を、不幸なるものに助力を與へることが出來るやうになつてゐるからである。……「あゝ私にもさういふことが出來さへしますならば、やつて見たいものですが…」と子供等が答へた時、常に彼等は非常に感激して兩眼に涙を浮べることさへあつた。

24. 54. 16. 「……時には食べ物なしですまさねばならぬかも知れない。だから、皆さんはすべてこれらの働いて起る結果に對して十分の覺悟しないでゐて彼等に來て欲しいなどいつてはならない」…

26. 57. 3. interest 關與させる。

27. 62. 6. so utterly devoid ……= they were so utterly devoid of ideas……

29. 62. 7. a few more or less correct ideas. 正確さの度合に多少のある（十分に正確でない）若干の觀念

31. 70. 1. （本書六五頁參照）

32. 72. 8. どんなに勤勞努力しても、汝等が損れてしまつた所のものを得ることを絶來不可能にするやうな樣式で、汝等を今生活さるのはよいことであるかどうかを考へてみて私にいつてくれ。（今

あまり贅沢な生活をさせておくと、彼等が独立した後どんなに辛棒しても自ら満足を得るやうな生活をすることは出来ないから、かくいふのである）

23. 73. 10. 私共は先生の仕打に決して不平はもちません。罰など決して受けないやうにしたいものです。when we do—when we do deserve punishment. do は deserve を強める助動詞、

24. 74. 5. 彼等の間でわかる私への信頼に背かむことを思ふさへ私は堪へられなかつた。さうして何物も彼等の天使のやうな目、それをたゞ見るだけでまことに深き歓びを私に與へたあの目を曇らせないやうに、彼等の個性を自由に発達させることは勿論、常に（私への）信頼を強めようと努めた。

38. 81. 4. 私共の生活を支配する眞理を實際で表現するといふことは、或る人々によつて（有用であると）考へられてゐるほどそれほど人類に對しては一般に有用ではない。或る人々といふのは過去幾世紀間、効果も顧みずして同答法によつて傳統されるキリストの教訓を聞き慣らされて居る人々であり、又あはれむべき現代記の狂氣が意識的に空虛な言論を興隆したのを三十年来見て来てゐる人々であり、悲しい故この時代の狂氣を再演すると期してゐるその人々である。

38. 83. 1. 余の經驗によれば（教授）の成功は、教授事項が子供等自身の個人的な觀察や經驗と密接に結合されることによつて、眞理として子供等の注意を惹くかどうかといふことに、依存する。

39. 84. 3. 眞理や正義は確かに人類には空虛な言論以上のものである。といふのはそれらは内的確信……のあらはれであるからであつて、それらの力が表現せられる外的な記號については言はずもがなである。

39. 85. 6. 又それ（眞理と正義との感情）は誤謬、無智、迷信、たとひそれら自身が如何程強いにせよ、彼を動かすことを決して許さぬであらう。——誤謬、智無、迷信が、個人の愛若くは正義をもたないで宗教や正義に就いて絶えず喋々してゐる人々を動かし又常に動かさずには止かぬと同様

には。

39. 86. 4. 無意識圏の闇黒から出来てゐる謂に詩ひ子となれる水泳者（根本原理を把捉せずして多くの派生的問題に迷はされてゐる者）を次のやうな商人に比較せざるを得ない。その商人といふのは……

41. 90. 1. （本書六三頁参照）

42. 94. 7. （本書六七頁参照）

42. 95. 1. （本書六七頁参照）

48. 103. 8. この語の教授は、記憶の練習にすぎないやうに見えるであらう。成程それは事實ではあるが、併しながら若し記憶が心理學的に排列されたる一群の觀念に適用されるならば、その一群の觀念は他のすべての能力を働かしめることになるのである。

50. 106. 5. 私が最も多く期待をかけた人達（ルグラン、スタツプアーの如き人であらう）はあまりに深く放蕩に沒頭したので、最少程度の重要さをもつものとして（あまり重要でないとして）私共の小さな實驗院のことなんか考へなかつた。

スキーのくすりロップ　一部　定價十五錢

昭和[illegible]年[illegible]月[illegible]日　印刷
昭和[illegible]年[illegible]月[illegible]日　發行

著作兼發行人　[illegible]　[illegible]　[illegible]

印刷兼發行所　[illegible]　[illegible]　[illegible]郎
東京市[illegible]区[illegible]町[illegible]番地

印刷所　[illegible]　[illegible]　[illegible]所
東京市[illegible]区[illegible]町[illegible]番地

東京市[illegible]区[illegible]町[illegible]番地
[illegible]出版部

（[illegible]）

[illegible]

595
114

あいさつ

▽名づけて新興社教育叢書といふ。その古典たると新奇たるとを問はず、また著述たると翻訳たるとを辨ぜず、いやしくも採つて以て「教育の精神」を培ふに足るものは古今東西の分ちなく、この叢書に盛りたいと思ふ。

▽敢えて「教育の精神」といふ。實際教育に携つてゐる者が、この立場を誤つては百の研究も一の効を奏しないからである。而してこの憂ひの現代になしとせむや。

▽叢書は簡便に、價は安きを旨とした。これ特く志ある學徒の手に愛せられむことを希ふたが故である。